



TITLE:

心が活きる教育のための国際的拠点 : 外部評価報告書

AUTHOR(S):

子安, 増生

CITATION:

子安, 増生. 心が活きる教育のための国際的拠点 : 外部評価報告書. 2009

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/139372>

RIGHT:



文部科学省「グローバル COE プログラム」研究拠点形成費補助金
(京都大学 機関番号 14301 拠点番号 D-07)

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

外部評価報告書

2009 年 3 月



文部科学省「グローバル COE プログラム」研究拠点形成費補助金
(京都大学 機関番号 14301 拠点番号 D-07)

心が活きる教育のための国際的拠点

Revitalizing Education for Dynamic Hearts and Minds

外部評価報告書

2009 年 3 月

目 次

1. はじめに	1
2. 外部評価の方法	2
3. 自己点検・評価	5
4. 外部評価の結果	40
5. 外部評価結果の総括	65
資 料	74

1. はじめに

私どものグローバル COE は、平成 19 年度より、京都大学の心理学および教育学のスタッフが総力を挙げて「心が活きる教育のための国際的拠点」形成のために取り組んできた。具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものかを解明し、それをどのように理解し実践していくかについて、教育学研究科、高等教育研究開発推進センター、文学研究科、人間・環境学研究科、及び、こころの未来研究センターに所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、「心が活きる」とはどういうことかを研究する基礎過程（ユニット A）、「心が活きる」ために必要な制度設計について研究するシステム（ユニット B）、「心が活きる」ために有効な心理的サポートについて研究ならびに実践を行うサポート（ユニット C）、国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価（ユニット D）という 4 つの研究ユニットを中心に研究を進め、国際的ネットワークの形成に取り組み、拠点の大学院生等を対象とする人材育成のためのさまざまな活動を行ってきた。

事業の 2 年目にあたる本年度が終了した時点で、19 年度に採択されたすべての拠点がグローバル COE プログラム委員会から中間評価を受けることになっており、これに対応するため、自己点検・評価書を作成し、事前に外部評価を受けることにした。外部評価委員をお願いしたのは、関連学会でご高名かつご見識があり、私どもの拠点とは直接のつながりがない 6 人の先生方（心理学系、教育学系各 3 人）である。外部評価委員の先生方は、お忙しい中、段ボール箱ひと箱分の資料に目を通し、数々の貴重な助言ならびにコメントと真摯な評価結果を返して下さった。委員の先生方には、拠点を代表して、ここに心から感謝の意を申し上げたい。

評価というものは、すべからく次の改善につながるものでなければならない。いただいた外部評価結果をもとに、ここに外部評価報告書を作成するとともに、残る事業期間の活動のために必要な計画の修正をおこない、有効かつ効率的な活動を展開していきたい。

平成 21 年 3 月 10 日
拠点リーダー 子安増生

2. 外部評価の方法

外部評価委員の選定にあたっては、本拠点の意思決定機関である執行委員会で候補の選出を行った。候補選定の基準は、「関連学会でご高名かつご見識があり、本拠点とは出身校や勤務校という点で直接のつながりがない心理学系および教育学系の研究者」である。2008年9月30日付けで「外部評価審査委員のご協力をお願い」（巻末「資料1」）を発送し、協力依頼を行った。ご協力を頂けない旨の返信があった場合は別の先生に依頼を行い、下記に示す心理学系3人、教育学系3人の先生方に外部評価委員をお引き受けいただいた。

心理学（発達/社会）：安藤寿康・慶應義塾大学教授

心理学（臨床）：野島一彦・九州大学教授

心理学（認知/比較）：長谷川寿一・東京大学教授

教育学（方法/生涯/高等教育）：安彦忠彦・早稲田大学教授

教育学（社会/行政/比較）：小松郁夫・玉川大学教授

教育学（哲学/歴史）：松浦良充・慶應義塾大学教授

その後、2008年11月13日付けで外部評価に係る依頼状（巻末「資料2」）と下記の資料を送付した。評価のご報告は、2008年12月15日をめどにお送りいただくこととした。

- ・「平成19年度活動報告書」
- ・「自己点検・評価報告書」
- ・研究業績：書籍一式（巻末「資料3」）
- ・研究業績：論文別刷、新聞記事など（巻末「資料3」）
- ・外部評価用スコアシート
- ・返送用封筒
- ・CD-R（自己点検・評価報告書、外部評価用スコアシートのファイル）

このうち、「自己点検・評価報告書」は、次章に全文を掲載する。研究業績のリストは、巻末「資料3」に示した通りである。

「外部評価用スコアシート」は、評価者の氏名、所属、記入日を書いていた後、資料に基づいて評価を行い、次ページ以下の7項目について、それぞれ5段階で本拠点の活動の評価を求め、最後に2,000字～3,000字程度で自由にコメントを書いていた。

2. 外部評価の方法

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☐ 非常に高い
- ☐ 高い
- ☐ 普通である
- ☐ 低い
- ☐ 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☐ 非常に高い
- ☐ 高い
- ☐ 普通である
- ☐ 低い
- ☐ 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をされると思われますか。

2. 外部評価の方法

- ☐ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☐ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☐ 確かにそう思う
- ☐ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☐ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

以下の章では、「3. 自己点検・評価報告書」、「4. 外部評価の結果」「5. 外部評価結果の総括」の順で示すこととする。「自己点検・評価報告書」は、外部評価委員会にお届けした全文、「外部評価の結果」は寄せられた報告書の全文をそのまま掲載するものである（誤字などごく一部の点において修正を行っている）。

3. 自己点検・評価

I. 拠点の申請内容

機関名：京都大学

拠点のプログラム名称：心が活きる教育のための国際的拠点

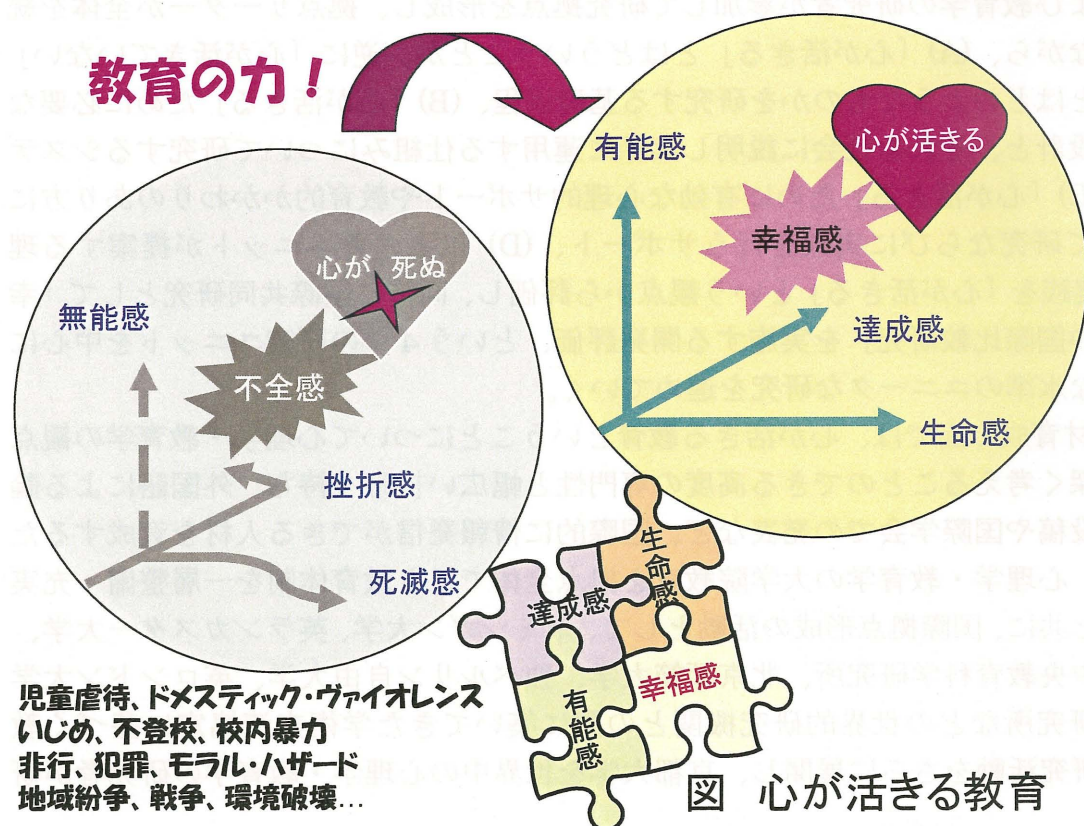
中核となる専攻等名：教育学研究科（教育科学専攻）

事業推進担当者：（拠点リーダー）教育学研究科教授・子安増生 外18人

1. 拠点形成の目的と概要

〔拠点形成の目的〕

20 世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痼というべき矛盾を克服することができず、21 世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定して考えても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてきた。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の心が活きるものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。



人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえた「達成感」というものが得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感じることでもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められており、本プログラムはそれに真正面から応えようとするものである。

〔拠点形成計画の概要〕

本プログラムは、21世紀COE「心の働きの総合的研究教育拠点」（平成14年度～18年度）の多大な成果を基礎として、京都大学の心理学および教育学の研究者が有機的に連携しながら、国際的に活躍する有為な人材育成のための新たな拠点を形成するものである。具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものかを解明し、それをどのように理解し、あるいは実践していくかについて、教育学研究科（教育科学専攻、臨床教育学専攻）、高等教育研究開発推進センター（第一部門）、文学研究科（行動文化学専攻）、人間・環境学研究科（共生人間学専攻）、および、平成19年度に設置される「こころの未来研究センター」に所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、拠点リーダーが全体を統括しながら、(A)「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものかを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計と、それを社会に説明し実際に運用する仕組みについて研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について研究ならびに実践を行うサポート、(D)以上の各ユニットが提案する理論・実践を「心が活きる」という観点から評価し、同時に国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価、という4つの研究ユニットを中心に高度な水準のユニークな研究を進めていく。

人材育成の面では、心が活きる教育ということについて心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成するために、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を一層整備・充実すると共に、国際拠点形成の活動として、米ミシガン大学、英ランカスター大学、中国中央教育科学研究所、北京師範大学、独ベルリン自由大学、英ロンドン大学教育研究所などの世界的研究機関との間に築いてきた学術交流協定に基づく教育・研究活動をさらに展開し、京都大学を世界中の心理学・教育学の研究者が研

究の発展を求めて集まる拠点としていく。また、広い視野から深く考え、心と教育に関する諸問題の解明・理解・実践に貢献しうる人材の進路が、大学等の研究機関のほか、官庁・企業等にも広がるよう、その支援体制を一層整備する。

博士課程学生を含む若手研究者のテニュア取得にいたるまでの支援としては、大学院生に対する競争的研究経費の支援、リサーチアシスタント(30人)の採用、公募によるポスドク研究員(10人)の採用、国際的公募による助教の採用(5人)、および、テニュア取得以前、あるいは、テニュア取得からまだ年数の浅い30歳代の若手教員に対する競争的研究費の支援などを行う。

以上のような活動を通じて、心理学と教育学が交差する新たな教育・研究領域の創成をはかり、京都大学の内部は言うにおよばず、学術全体における人文科学の発展に貢献し、社会の改革や改良に資する学術的情報を提供し、自らも有効かつ効果的な教育実践を行っていくものである。

2. 拠点形成の目的、必要性・重要性、期待される効果

①-1 本拠点がカバーする学問分野

「心が活きる教育」の解明と実現をめざす本拠点がカバーする学問分野は、第一義的には「心理学」ならびに「教育学」である。そこには、哲学、歴史学、進化学、神経科学、認知科学、発達論、生涯学習論、臨床心理学、メディア学、文化論、制度論などの方法論が含まれる。

この一見多様な方法論を、実現さるべき価値目標から見ると、問題の解明(analyzing)を目指す「実証学」、問題の理解(understanding)を深める「臨床学」、問題の解決(solving)を実行する「実践学」という3つの知から構成される。

本プログラムは、この3つのアプローチの先端的研究から「心が活きる教育」について総合的に考察し、広く社会に提言を行っていく世界的教育研究拠点を形成し、研究職を中心とするさまざまな場で活躍しうる有為な人材を育成することを目指すものである。

①-2 世界最高水準の優れた研究基盤や特色ある学問分野の開拓を通じた独創的、画期的な研究基盤を前提に、拠点としてどのような人材育成や研究活動を行うのか、それによりどのような拠点を形成するのかなど拠点形成計画の構想・目的・必要性

20世紀は、科学・技術・産業などが飛躍的進歩を遂げると同時に、貧困・犯罪・テロリズム・地域紛争・戦争・環境破壊のような人類の宿痼というべき矛盾を克服することができず、21世紀においても、近代社会の限界から生ずる個人、社会、地球全体のさまざまなレベルにおける解決困難な課題が持ち越されている。学校教育という場面に限定しても、いじめ、校内暴力、不登校という学校関係者や保護者を悩ませる現象は、人間の心のあり方について大きな問題を投げかけてき

た。人間が作り出すさまざまな制度や組織は、本来そこに生きる人間の「心が活きる」ものでなければならないが、現実には制度や組織が人間を苦しめたり、心を萎えさせたりしている。

心の問題は、さまざまなフィールドで取り上げられるべきものであるが、中でも教育というフィールドは最も重要なものの代表格である。ただし、高度に情報化された現代社会においては、教育が学校教育という狭いフィールドに限定されるのではなく、時間的空間的に拡張された、人間の生きる包括的な文脈での生涯学習あるいは生涯発達の視点が不可欠である。

人間は、教育というものを通じて、知識と技能を獲得することによって自身が何事かをなすことができるという「有能感」を得、自然や社会とつながることによってこの世界に生きているという「生命感」を得る。さらに、この2つの感覚を一定の目標に向けて十分に発揮することによって何かをなしえたという「達成感」が得られる。そこに、同時に「幸福感」というものを感じることでもできよう。反対に、このリンクの一部あるいは全部がうまく機能しないとき、様々な問題が起こってくる。

心と教育の諸問題に注目が集まる今日の社会において、このような枠組みから「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置が強く求められているのである。また、本拠点で育成される人材像として、大学等の研究機関で活躍できる者は言うまでもなく、少子高齢化社会において社会の活性化をはかるために期待されている新たな教育産業の創生に貢献できるような、ユニークな人材をも視野に入れている。

①-3 本拠点が我が国の COE としてどのような重要性・発展性があるのか、いかに優れたもの、または、ユニークであるか

京都大学は、1897 年の設立当初から知識注入主義でなく自学自習を重んずる「自由の学風」を伝統としてきた。たとえば湯川秀樹博士を嚆矢とする本学のノーベル賞学者の輩出は、このような自由の学風の伝統から生まれてきたものである。蓋し、世界の最高水準の研究というものも、その基本は研究者が自らの学問的関心に基づいて自律的に行う活動およびその成果である。その際、研究者が唯我独尊に陥らないように、絶えざる自己革新を行い、研究自体が自らの有能感、生命感、達成感を高め、大学という場においてその構成員の幸福感を高めることは、わが国の今後の学術の発展にとって最も重要な点であろう。本拠点は、研究テーマそのものが高い実践性を有していることが他とは異なるユニークな点のひとつである。本拠点において最も重要なキーワードの一つに「育てる人を育てる」がある。「育てながら自らも育ち、育てられながら育てる力をつける」という教育の再帰的機能 (recursive function) が本拠点の研究テーマとなっており、このことが他の拠点には見られない大きなアドヴァンテージである。

また、広く世界の学術の趨勢を眺めるならば、いわゆる研究大学（research university）においては、文科系諸学と理科系諸学は必ず並行して発展する形態をとっている。人文科学の発展は、学術の発展にとって不可欠の部分である。そのことの実現のためには、人文科学に属する各研究分野が狭い殻から抜け出て、学術の世界的基準とは何かを的確に認識し、それを達成し凌駕しうるように絶えざる自己革新を行っていく必要がある。

人文科学の中でもとりわけ西欧に大きな学問的源流がある心理学・教育学において、教育・研究の国際化を一層推進するとともに、「自然や社会とのつながり」を重視する東洋的伝統を受け継ぐ「生命性」の概念を取り入れた心理学・教育学の研究が目指すところは、いわゆる「文明の衝突」の危機におかれている世界に対して、「心が活きる教育」という明確な提案を行うことであり、そのことがわが国の COE、ひいては我が国の学術全体の発展にも大きく貢献しうるものである。

② 本プログラムで行う事業が終了した5年後に期待される教育研究の成果及び拠点により見込まれる学術的または社会的な意義・波及効果等

教育・研究成果についての5年後に期待できる具体的な成果ならびに意義をまとめると次のようになる。

i) 世界最高水準の教育・研究の推進：

本拠点に属する教員・大学院生による世界最高水準の国際誌への投稿・掲載論文が増えるとともに、外国のトップレベルの大学で活躍する研究者が教育・研究上の提携や共同研究を希望する研究機関として、本拠点の地位がさらに高まる。1957年の刊行以来、教育学部・教育学研究科で編集・発行してきた英文国際誌 *Psychologia* は、人文科学系では数少ないインパクトファクターを有する雑誌であるが、その国際情報発信機能がさらに向上する。教育面では、外国の大学院生の留学受け入れを増やすとともに、これまでも拠点の教員が外国の大学の客員教授として授業を担当するケースがあつたが、この面での教育的貢献が増えていく。研究テーマの面では、有能感・生命感・達成感を柱とする「幸福感の国際比較研究」を国際的共同研究として実施し、その成果を広く世界に問い、研究上の刺激を巻き起こす。

ii) 創造的な人材育成：

部局単位ではなく京都大学全体として実施する心理学・教育学の充実したカリキュラムのもとで、幅広く学際的に学び、かつ深く専門的に研究を行うことによって博士の学位を取得する修了者が増える。狭いアカデミズムの世界に閉じこもらず、広い視野に立って個人・社会・地球が抱える心と教育に関する諸問題の解明・理解・解決に貢献できるような人材を輩出し、大学等の研究機関だけでなく、

官庁・企業等においても活躍する者が増える。特に、社会の変化に対応する新たな教育産業の創生に貢献できる人材育成が可能となる。

iii) 社会との連携・協力の進展：

現在、教育学研究科が中心となっていて行っている各種教育機関（たとえば、京都府・京都市の教育委員会、小・中・高等学校、総合教育センター等）、司法機関（たとえば、京都家庭裁判所）、医療機関（たとえば、京都大学医学部附属病院）、その他府下の過疎地域活性化事業や子育て支援事業等との連携・協力関係がさらに深まっていく。本プログラムの成果は、中・高生にも理解しうる形で世の中に公開され、心と社会の諸問題についての研究成果が分かりやすく親しみやすい形で広く社会に還元される。

3. 拠点の運営体制

拠点として機能するための運営マネジメント体制

① 拠点リーダーを中心とした事業推進担当者の教育研究活動の連携体制

本プログラムの研究者構成メンバーとして、教育学研究科の教員を中心とし、高等教育研究開発推進センター、文学研究科、人間・環境学研究科、こころの未来研究センター（平成 19 年度設置）に所属する心理学および教育学の教員が参加して、本拠点を形成する。霊長類研究所の心理学者からは、21 世紀 COE の場合と同じく、側面から協力を得る約束を得ている。

運営組織として、拠点リーダーがプログラム全体を統括するが、重要事項は執行委員会で審議し決定する。執行委員会を補佐する実務委員会として、予算の立案とその執行を所掌する財務委員会、教員・ポスドク・大学院生の国際交流を所掌する国際委員会、教育カリキュラム編成を所掌する教育推進委員会、ポスドク・大学院生・若手教員のサポートを行う育成支援委員会、ニューズレターの発行、マスメディアへの対応、およびインターネット上の情報管理を含む広報宣伝活動を行う広報委員会の 5 委員会を置く。また、本部事務機構との連携をはかるため、事務職員を加えた COE 事務局を設置し、情報を集約・管理し、メンバーならびに各委員会との連絡調整に当たる。

研究面については、相互に連携をとりながら、次の 4 つの研究ユニットを中心に進めていく。

A. 基礎過程：「心が活きる」とはどういうことか、逆に「心が生きていない」状態とはどのようなものを、教育学、教育史学、神経科学、認知心理学、比較認知科学などの観点からその基礎過程について検討する。21 世紀 COE の主要な成果の一つである感情科学（affective science）の基礎の上に、その一層の展開を目指すことが特に大きな柱の一つとなる。

B. システム：「心が活きる」ために必要な社会システムの構築あるいは制度設計と、それを社会に説明し実際に運用するシステムについて、比較教育政策学や社会心理学などの視点から研究を行う。特に、(1) 地域が有する教育可能性、(2) ソーシャルスキルの育成可能性、(3) 電子メディアを介した教育（たとえば e ラーニング）の可能性、(4) メディアリテラシーおよび批判的思考力の育成可能性などについての解明をめざすと共に、その実践課題を提言する。

C. サポート：保護者、教師、仲間といった関係の中で、個人の「心が活きる」方向を考えながら、発達障害などの問題を心理臨床的および教育臨床的に理解すること、個人の「心が活きる」ことによって周りの人間、学校、社会などとの「関係が活きてくる」様子を捉えることを目標とし、「心が活きる」ために有効な心理的サポートや教育的かかわりのあり方について、主として臨床的アプローチの方法やナラティブ・アプローチの方法を用いて検討し、効果的な実践を行う。

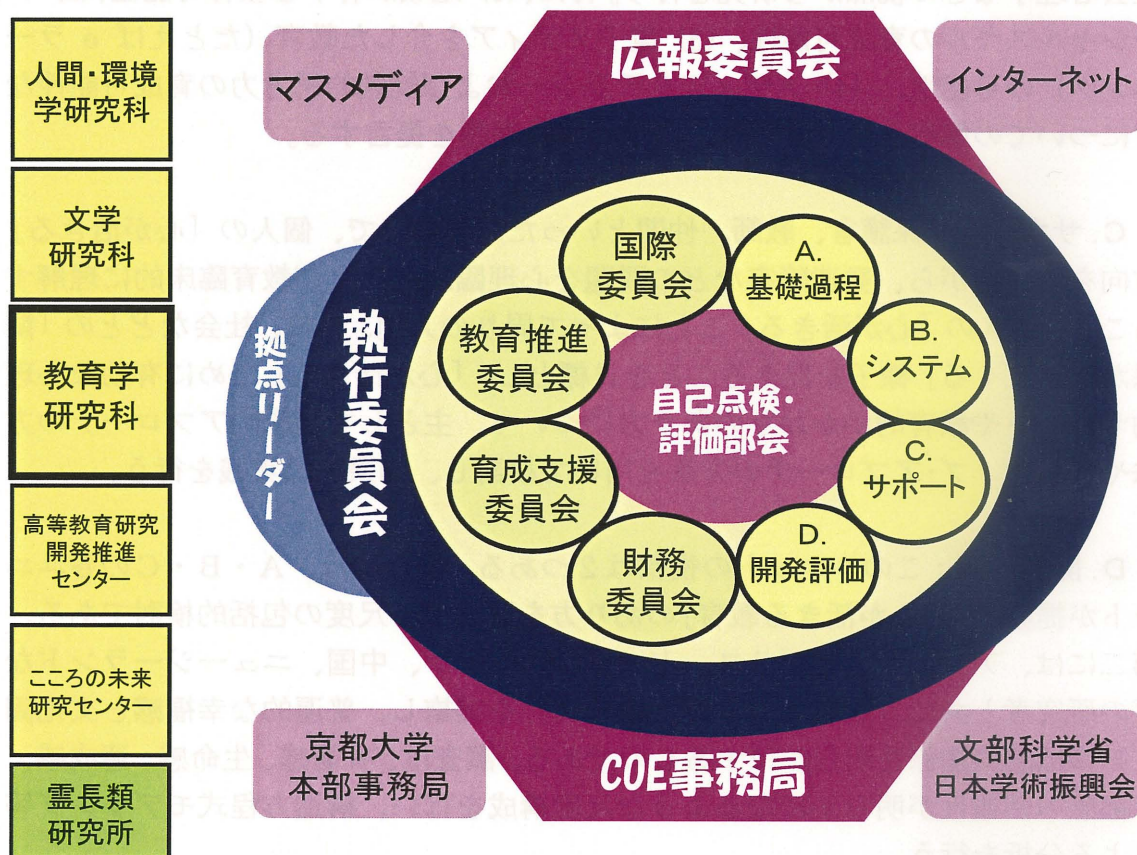
D. 開発評価：このユニットの役割は2つある。第一には、A・B・Cの各ユニットが提案する「心が活きる教育」のあり方を評価する尺度の包括的検討である。第二には、アメリカ、イギリス、ドイツ、スペイン、中国、ニュージーランドなどの研究者と共に「幸福感の国際比較研究」を実施し、普遍的な幸福感と文化固有の幸福感の関係を明らかにするものである。調査は、有能感、生命感、達成感、幸福感の関連性が明らかになるような尺度構成を行い、構造方程式モデリング等による分析を行う。

② 教育研究活動の状況を組織的に把握・改善する仕組み、自己点検・評価体制（外部者による評価も含む）の整備

21 世紀 COE においては、年度末に「年次報告書」を毎年作成し刊行してきたほか、最終年度には英文の外部者用評価報告書を作成し、日本人研究者 1 人、外国人研究者 4 人からの外部評価を受けた。本プログラムでは、ユニット D「開発評価」のメンバーを中心に自己点検・評価部会を設置し、「年次評価報告書」を作成・刊行するほか、2 年目の中間評価の時点ならびに最終年度において、外部者評価用報告書を作成する。また、拠点の教育機能の自己点検・評価に関しても自己点検・評価部会において学生による評価を含め、必要な評価を行っていく。

なお、拠点リーダーは、平成 16 年度から平成 20 年度（予定）まで、財団法人・大学基準協会の相互評価委員を任ぜられており、3 年間にわたって全学評価分科会担当としての評価活動の経験があり、自己点検・評価の実際には習熟している。

4. 拠点の運営体制の概念図



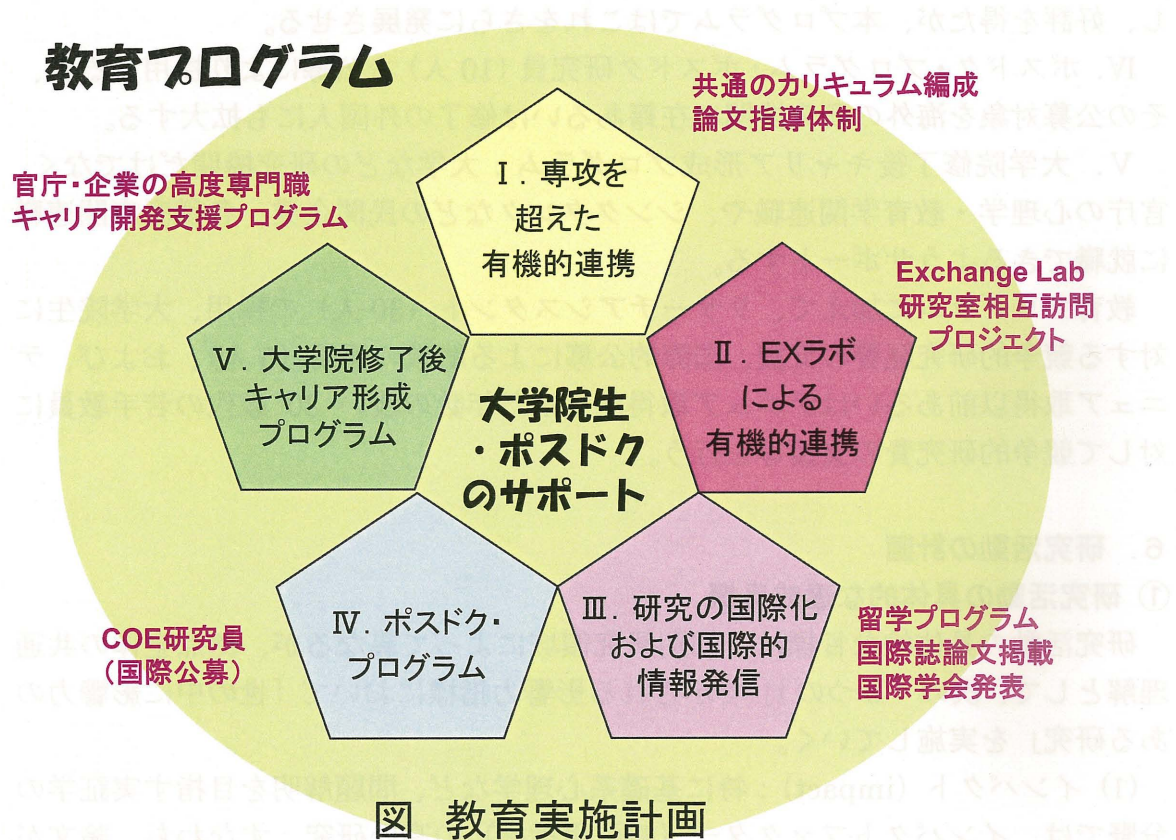
5. 人材育成の計画

① 人材育成の具体的な達成目標（学生に対する教育については、専攻等の人材育成目的を踏まえた達成目標）

本プログラムが21世紀COE拠点として既に内外からの高い評価を得ていることを踏まえて、次の各項目について、研究の質を高めつつ、「5年間で約30パーセント増」を量的達成目標とする。

- (1) 課程博士を取得して修了する大学院生数。
- (2) 心理学の基礎的分野では、インパクトファクターを有する雑誌への論文掲載数。
- (3) 国際学会での博士課程大学院生の発表件数。
- (4) 海外において研究活動の経験のある博士課程大学院生数。
- (5) 外国から共同研究で招聘する博士課程大学院生数。

これに加えて、幸福感の国際比較研究で開発する尺度を用いて、大学院博士課程学生の満足度と充足感を測定しながら、それを高めていくことを質的達成目標とする。



② ①の人材を育成するための具体的な教育計画

- ・人材育成のために必要な指導体制（研究指導体制、キャリアパス形成に対する支援体制など）、教育プログラム等
- ・博士課程学生に対する経済的支援や、若手研究者に自立して活躍できる機会を与えるなど、若手研究者がその能力を十分に発揮できるような取組
- ・国内外の優れた教員の雇用・招聘や留学生を含む若手研究者の派遣・受入れ、海外の大学等と協力した人材育成プログラムの実施など、国際的に活躍できる人材を育成するための工夫など、本拠点における人材育成のために実施する教育プログラムの概略は以下の通りである。

I. 専攻を超えた研究指導体制：専攻や課程の壁を越えて幅広い視野を持つ研究者を養成するためにカリキュラム編成と論文指導体制の整備を拠点全体で行う。

II. EXラボによる有機的連携：研究室相互訪問など、心理学・教育学の大学院生が共同して参画する“Exchanging Laboratory Program”（EX ラボ）を実施する。

III. 研究の国際化および国際的情報発信：世界的研究機関との学術交流協定に基づく留学を支援し、国際学術誌投稿と国際学会発表をサポートする。21 世紀 COE では、日本国内と海外の数大学に呼びかけて招聘した大学院生・ポスドクを含めた国際ヤングサイコロジスト・ワークショップ（平成 15～18 年度）を実施

し、好評を得たが、本プログラムではこれをさらに発展させる。

Ⅳ. ポスドク・プログラム：ポスドク研究員（10 人）を公募により採用するが、その公募対象を海外の研究機関に在籍あるいは修了の外国人にも拡大する。

Ⅴ. 大学院修了後キャリア形成プログラム：大学などの研究機関だけでなく、官庁の心理学・教育学関連職や、シンクタンクなどの民間企業、各種医療関連職に就職できるようサポートする。

教育プログラムに加えて、リサーチアシスタント（30 人）の採用、大学院生に対する競争的研究経費の支援、国際的公募による助教の採用（5 人）、および、テニユア取得以前あるいはテニユア取得からまだ年数の浅い 30 歳代の若手教員に対して競争的研究費の支援等を行う。

6. 研究活動の計画

① 研究活動の具体的な達成目標

研究活動の具体的な目標は、個別研究領域によって異なるが、拠点全体の共通理解として、次の「3つのi」で示される影響力指標において「世の中に影響力のある研究」を実施していく。

(1) インパクト (impact)：特に基礎系心理学など、問題解明を目指す実証学の分野では、インパクトファクター（被引用指標）の高い研究、すなわち、論文が内外の研究者から頻繁に引用されるような研究を目指す。達成目標としては、「インパクトファクターを有する雑誌への掲載数が5年間で約30パーセント増」を達成目標とするが、その質的な面も重視する。

(2) インフルエンス (influence)：特に問題理解を志向する臨床学や、問題解決を志向する実践学の分野では、社会からの「心」と「教育」の見方を根底から大きく変える実効力・感化力のある研究を目指す。行政機関の諮問会議などを通じての政策提言はその一例となる。

(3) インプレッション (impression)：研究目標として何を志向するかにかかわらず、社会に対して、心理学、教育学は変ってきたと思わせる印象（インプレッション）を与える研究を目指す。出版活動に加えて、マスメディアやインターネットを通じた広報宣伝活動も重視する。

② ①を実現するための具体的な計画

(i. 国際的なネットワークの構築、国内外の優れた研究者の雇用・招聘や若手研究者の派遣・受入れ、海外の研究機関等との連携、諸外国への積極的な情報発信など、国際的な拠点形成をどのように実現するのか、ii. 拠点形成計画に参画する研究者が実質的に協力・連携し、拠点形成に向けて十分貢献する体制となっているのかを含む)

i. 国際的なネットワーク構築活動等の根拠と今後の計画：

国際的活動の基礎となる準備状況ならびに拠点の実施計画は以下の通りである。

(1) 米ミシガン大学：平成 15 年 12 月にミシガン大学で実施した「京都大学国際シンポジウム」と、同時に締結した大学間学術交流協定に基づく研究を推進する。特に、「幸福感の比較文化研究」を行っているミシガン大学・北山忍教授（社会心理学）と緊密な連絡をとって進めて行く。

(2) 英ランカスター大学：平成 18 年 10 月にランカスター大学で開催した認知心理学・発達心理学の国際シンポジウムを基盤とし、同時に締結した部局間学術交流協定に基づき「実行機能の発達」の国際共同研究を推進する。平成 19 年 8 月に国際シンポジウムを京都大学で開催予定である。

(3) 中国中央教育科学研究所：平成 18 年 10 月に研究科との学術交流協定を締結した。その後、「日中教育共同研究センター」を設置した。具体的には「日中の学力実態に関する比較調査」を共同で実施し、教育改革に係る政策提言につなげていく。

(4) 中国北京師範大学：平成 18 年 6 月に北京師範大学において開催した「日中合同教育学系国際シンポジウム」と、同時に締結した部局間学術交流協定に基づく共同研究を推進する。院生主体セミナーを継続的に実施する。また非常勤講師の交換交流活動を継続的に実施する。

(5) 独ベルリン自由大学：平成 17 年 3 月開催の国際シンポジウム（京都）、平成 18 年 7 月の日独シンポジウム（ベルリン）、平成 19 年 2 月に日本で開催予定の会議を受けて、「リスク・マネジメント」研究を軸に、大学院生主導のシンポジウムを中心に据えた活動を展開する。

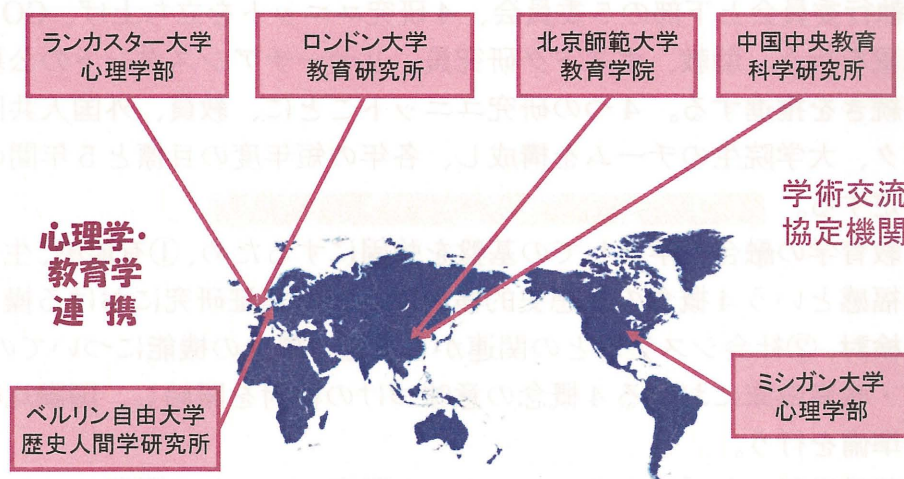


図 世界の学術交流協定機関等

(6) 英ロンドン大学教育研究所：本年にロンドン大学教育研究所に移籍予定の教育学の英国人教授を平成 16 年 5 月、17 年 10 月、18 年 11 月の 3 回にわたり教育学研究科に招聘し、大学院生の研究指導を依頼した。欧州の教育研究の中心地であり、北京師範大学とも活発な交流があることから、欧州とアジア、教育学と心理学の対話的融合を促進するような教員・大学院生の交流を行う。

以上のような国際的拠点の相互連携をはかりネットワーク化することを通じて、国内外の優れた研究者の雇用・招聘、若手研究者の派遣・受入れ、海外の研究機関等との連携、諸外国への積極的な情報発信を行っていく。拠点の活動内容を紹介するホームページの主要部分を英文化する。

ii. 拠点形成計画に参画する研究者が相互に実質的に協力・連携、拠点形成に貢献する体制

研究者の協力・連携体制は、これまで 21 世紀 COE と「魅力ある大学院教育」イニシアティブの活動を通じて醸成され、確固としたものとなっている。本プログラムにおいて、心理学と教育学の連携が最も進むことが期待されるのは、幸福感の国際比較研究である。有能感、生命感、達成感、幸福感という 4 概念の思想史的検討ならびに操作的概念としての検討、社会システムとの関連からの検討、心理臨床・教育臨床における意味づけの検討など、多角的な分析を総合することによって、研究全体が大いに進展し新たな研究領域の創生が実現するものと考えている。

⑤ 年度別の具体的な研究活動面の実施計画

平成 19 年度：

およそ前期の終わるころまでに、プログラム全体の研究基盤の整備・形成を行う。まず、執行委員会と下部の 5 委員会、4 研究ユニットを立ち上げ、COE 事務局の人員配置を行う。助教、ポスドク研究員、リサーチアシスタントの公募ならびに採用手続きを推進する。4 つの研究ユニットごとに、教員、外国人共同研究者、ポスドク、大学院生のチームを構成し、各年の短年度の目標と 5 年間の長期的目標を策定する。

心理学と教育学の融合科学としての基盤を強固にするため、①有能感、生命感、達成感、幸福感という 4 概念の思想史的検討ならびに実証研究における操作的概念としての検討、②社会システムとの関連から上記 4 概念の機能についての検討、③心理臨床・教育臨床における 4 概念の意味づけの検討を開始し、国際比較研究にむけての準備を行う。

また、「基礎過程」と「システム」の 2 つの研究ユニットで国際ワークショップを開催する。

平成 20 年度：

4 つのユニットの研究機能を集約し、4 概念の相互関連を分析していくための、危機的状況に対処する際の心の働きについて多角的にアプローチするための作業

概念として「リスク・マネジメント」と「リスク・パフォーマンス」を設定し、具体的な研究を実施していく。

幸福感の国際比較研究に必要な尺度を構成するため、予備調査を実施しデータを分析する。また、国際調査で不可欠な調査項目の翻訳（バック・トランスレーションを含む）をこの年度に済ませておく。

「サポート」と「開発評価」の研究ユニットで国際ワークショップを実施する。

年度終了後に本プログラムの中間評価を受けるため、「自己点検・評価部会」を構成し、自己点検・評価中間報告書を作成の上、研究の進捗と人材育成の両面から外部評価を受ける。

平成 21 年度：

幸福感の国際比較研究の本調査を実施する。海外調査対象国は、学術交流協定を締結していたり、研究上のカウンターパートがいるアメリカ、イギリス、ドイツ、スペイン、ニュージーランド、中国などの国々である。可能なところから、データ分析作業に入る。

「基礎過程」と「システム」の研究ユニットで国際シンポジウムを実施する。

特に「システム」の研究ユニットでは、教育のメインストリームでは対応が困難な不適応・いじめ・不登校、特殊才能・生涯学習・遠隔学習者などの問題についての対応システムとして「オルタナティブ・システム」に関する研究を行う。

平成 22 年度：

幸福感の国際比較研究について、必要なフォローアップ調査あるいは追加調査があれば、この年度の前期までに実施する。年度の後期において、海外調査対象国の共同研究者を京都大学に招聘して、データ分析と解釈に関する国際シンポジウムを開催する。この実施に当たっては「開発評価」の研究ユニットが中心的な役割をになう。

「サポート」の研究ユニットで国際シンポジウムを実施する。

平成 21 年度までの活動成果を「心が活きる教育を進めるもの、阻むもの」というテーマの下、講演会ならびに公開講座などを実施し、成果の社会的還元を促進する。

平成 23 年度：

幸福感の国際比較研究について、すべての研究ステップを完了し、論文ならびに書籍の形式で成果を逐次刊行する。

平成 22 年度までの活動成果を「心が活きる教育の新たな展開」というテーマの下、講演会ならびに公開講座などを実施し、成果の社会的還元を促進する。

全ユニット合同の総括シンポジウムを開催する。

5 年間の研究の進捗と人材育成の成果について、自己点検・評価最終報告書を作成する。

Ⅱ. 参加メンバー 平成 19 年度

	職階		氏 名	所属ユニット	専門分野
人間・環境学研究科	教授	○	岡田敬司	A	教育人間学
	教授		小山静子	A	教育史学
	教授	○	杉万俊夫	B	社会心理学
	教授	○	齋木 潤	A	認知科学
	教授		松村道一	C	認知神経科学
	准教授		永田素彦	B	社会心理学
	助教		山本洋紀	A	視覚心理学
	助教		久代恵介	A	認知神経科学
文学研究科	教授	○	苧阪直行	A	知覚心理学
	教授	◎	藤田和生	A	比較認知科学
	教授	○	櫻井芳雄	A	認知神経科学
	准教授		板倉昭二	A	発達認知科学
	准教授		蘆田 宏	A	認知心理学
教育学研究科	教授	○	辻本雅史	A	教育史学
	教授	◎	鈴木晶子	D	教育哲学
	教授	○	山田洋子	C	生涯発達心理学
	教授		田中耕治	B	教育方法学
	教授	◎	子安増生	D	発達心理学
	教授	○	楠見 孝	B	認知心理学
	教授		岩井八郎	B	教育社会学
	教授		稲垣恭子	B	教育社会学
	教授		川崎良孝	B	図書館情報学
	教授		前平泰志	B	生涯教育学
	教授		高見 茂	B	教育行政学
	教授	◎	杉本 均	B	比較教育学
	教授		矢野智司	C	教育人間学
	教授		西平 直	A	教育人間学
	教授		藤原勝紀	C	臨床心理実践学
	教授		桑原知子	C	心理臨床学
	教授		伊藤良子	C	臨床心理実践学
	教授		皆藤 章	C	臨床教育学
	准教授		駒込 武	B	教育史学
	准教授		遠藤利彦	C	生涯発達心理学
	准教授		西岡加名恵	B	教育方法学
	准教授		齊藤 智	A	認知心理学
	准教授		渡邊洋子	B	生涯教育学
	准教授	○	佐藤卓己	B	メディア社会学
	准教授		金子 勉	B	教育行政学
	准教授	○	齋藤直子	C	教育人間学
	准教授		田中康裕	C	心理臨床学
	准教授	○	角野善宏	C	臨床心理実践学
	准教授		大山泰宏	D	臨床教育学
	助教		中池竜一	B	認知科学
	助教		川部哲也	C	社会心理学
	助教		安川由貴子	B	生涯教育学
	助教		石井英真	B	教育方法学
	助教		片畑真由美	C	臨床心理実践学
	助教		竹中菜苗	C	心理臨床学
	助教		楠山 研	B	比較教育学

3. 自己点検・評価

高等教育研究開発センター	教授	○	田中毎実	D	人間形成論
	教授		大塚雄作	D	教育心理学
	教授	○	松下佳代	D	教育方法学
	准教授		溝上慎一	D	青年心理学
	助教		酒井博之	D	音響心理学
こころの未来研究センター	教授	○	吉川左紀子	A	認知心理学
	教授		船橋新太郎	A	認知神経科学
	教授		カール・ベッカー	D	倫理学、宗教学
	教授	◎	河合俊雄	C	心理臨床学
	助教		久保南海子	A	認知発達心理学
	助教		番 浩志	A	認知神経科学
	助教		内田由紀子	A	社会心理学
霊長類研究所	助教		平石 界	A	認知心理学
	教授		松沢哲郎	A	比較認知科学
	准教授		友永雅己	A	比較認知科学
	准教授		佐藤 弥	A	認知心理学
	助教		田中正之	A	比較認知科学
グローバルCOE	助教		林 美里	A	比較認知科学
	COE助教		大塚結喜	A	認知心理学
	COE研究員		小島隆次	B	認知心理学
	COE研究員		廣瀬信之	A	実験心理学
	COE研究員		櫻井里穂	D	比較教育学

所属・職階は平成20年3月末時点のものを示している。

◎はリーダー職、○はリーダー以外の事業推進担当者を示す。

参加メンバー 平成 20 年度

	職階		氏 名	所属ユニット	専門分野
人間・環境学研究科	教授	○	岡田敬司	A	教育人間学
	教授		小山静子	A	教育史学
	教授	○	杉万俊夫	B	社会心理学
	教授	○	齋木 潤	A	認知科学
	教授		松村道一	C	認知神経科学
	准教授		永田素彦	B	社会心理学
	助教		山本洋紀	A	視覚心理学
	助教		久代恵介	A	認知神経科学
文学研究科	教授	○	荻阪直行	A	知覚心理学
	教授	◎	藤田和生	A	比較認知科学
	教授	○	櫻井芳雄	A	認知神経科学
	准教授		板倉昭二	A	発達認知科学
	准教授		蘆田 宏	A	認知心理学
教育学研究科	教授	○	辻本雅史	A	教育史学
	教授	◎	鈴木晶子	D	教育哲学
	教授	○	山田洋子	C	生涯発達心理学
	教授		田中耕治	B	教育方法学
	教授	◎	子安増生	D	発達心理学
	教授	○	楠見 孝	B	認知心理学
	教授		岩井八郎	B	教育社会学
	教授		稲垣恭子	B	教育社会学
	教授		川崎良孝	B	図書館情報学
	教授		前平泰志	B	生涯教育学
	教授		高見 茂	B	教育行政学
	教授	◎	杉本 均	B	比較教育学
	教授		矢野智司	C	教育人間学
	教授		西平 直	A	教育人間学
	教授		桑原知子	C	心理臨床学
	教授		伊藤良子	C	臨床心理実践学
	教授		皆藤 章	C	臨床教育学
	教授	○	角野善宏	C	臨床心理実践学
	准教授		駒込 武	B	教育史学
	准教授		西岡加名恵	B	教育方法学
	准教授		齊藤 智	A	認知心理学
	准教授		渡邊洋子	B	生涯教育学
	准教授	○	佐藤卓己	B	メディア社会学
	准教授		金子 勉	B	教育行政学
	准教授	○	齋藤直子	C	教育人間学
	准教授		田中康裕	C	心理臨床学
	准教授		大山泰宏	D	臨床教育学
	准教授		南部広孝	B	比較教育学
	助教		中池竜一	B	認知科学
	助教		安川由貴子	B	生涯教育学
	助教		片畑真由美	C	臨床心理実践学
	助教		竹中菜苗	C	心理臨床学
	助教		高嶋雄介	C	臨床心理学
	助教		赤沢真世	B	教育実践学
	助教		井谷信彦	A	教育哲学
	助教		モイセス・キルク	D	教育心理学

3. 自己点検・評価

高等教育研究開発センター	教授	○	田中每実	D	人間形成論
	教授		大塚雄作	D	教育心理学
	教授	○	松下佳代	D	教育方法学
	准教授		溝上慎一	D	青年心理学
	准教授		デビッド・ダルスキー	D	社会心理学
	准教授		田口真奈	D	教育工学
	特定准教授		酒井博之	D	音響心理学
	助教		河崎美保	D	教育心理学
	特定助教		石川裕之	D	比較教育学
	特定助教		及川恵	D	臨床心理学
こころの未来研究センター	教授	○	吉川左紀子	A	認知心理学
	教授		船橋新太郎	A	認知神経科学
	教授		カール・ベッカー	D	倫理学、宗教学
	教授	◎	河合俊雄	C	心理臨床学
	教授		鎌田東二	A	宗教哲学
	助教		久保南海子	A	認知発達心理学
	助教		番 浩志	A	認知神経科学
	助教		内田由紀子	A	社会心理学
	助教		平石 界	A	認知心理学
霊長類研究所	教授		松沢哲郎	A	比較認知科学
	准教授		友永雅己	A	比較認知科学
	准教授		佐藤 弥	A	認知心理学
	助教		林 美里	A	比較認知科学
野生動物研究センター	准教授		田中正之	A	比較認知科学
グローバルCOE	COE助教		大塚結喜	A	認知心理学
	COE助教		楠山 研*	B	比較教育学
	COE助教		ルーブレヒト・マッティク	D	教育哲学
	COE研究員		小島隆次	B	認知科学
	COE研究員		櫻井里穂	D	比較教育学
	COE研究員		清水亜紀子	C	臨床心理学
	COE研究員		廣瀬信之	A	実験心理学

所属・職階は平成20年11月10日時点のものを示している。

◎はリーダー職、○はリーダー以外の事業推進担当者を示す。

*は、2008年9月退職。

Ⅲ. 自己点検・評価

1. 研究活動の自己点検・評価

1. 1. 運営組織の構成

本拠点は、京都大学の5部局（教育学研究科、高等教育研究開発推進センター、文学研究科、人間・環境学研究科、こころの未来研究センター）に所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成している。拠点リーダーを含む19人の事業推進担当者のほかに、研究協力者の教員・COE 研究員60人が参加している（平成20年11月現在）。なお、霊長類研究所の協力教員4人は、生命科学系のグローバルCOEを本拠としつつ、本拠点とも連携している。

このように大勢のメンバーから成る拠点を運営する要になるのが、7人の事業推進担当者および補助職のCOE 助教から構成される「執行委員会」である。執行委員会は、平成19年6月22日の第一回委員会を皮切りに、平成20年11月10日現在、会議を22回開催し、研究教育面の重要事項について審議し決定してきた。この執行委員会のほか、申請書に掲げた執行委員会を補佐する実務委員会として、「財務委員会」、「国際委員会」、「教育推進委員会」、「育成支援委員会」、「広報委員会」の5委員会とを置いている。このほか、自己点検・評価部会ならびに、事務職員を加えたCOE 事務局を設置している。これらの委員会の活動状況は精粗があり、特に財務委員会と国際委員会については、実質的に執行委員会によってその機能が担われてきた。

研究運営面では、A～Dの4ユニットが自律・分散・協調的に活動することを目指し、ユニットへの資金配分は、年度当初の研究プロジェクトの公募に基づき、各ユニットの配分額を決定し、具体的な予算執行はユニットリーダーの裁量に委ねている。4人のユニットリーダーは、執行委員会の委員でもあるので、研究ユニットと執行委員会のコミュニケーションは円滑に行うことができる。

1. 1. 運営組織の自己点検・評価

本拠点の運営については、執行委員会による迅速でトップダウン的な意思決定のもとに、研究面ではユニット中心のボトムアップ的な活動を重視しつつ進めている。ただし、本拠点の最重要課題である「幸福感の国際比較研究」については、拠点リーダーが長となる幸福感尺度検討会（12人のメンバーから構成されている）によって研究を推進している。これまで2回の会議を開催し、幸福感研究の課題について共通理解を深めるとともに幸福感尺度の絞り込みを行ってきた。

以上のように、本拠点の研究組織は、拠点の目的を果たすべく整備が進み、機能していると言える。

1. 2. 各研究ユニットの研究の進捗状況

本拠点の研究は、上述のように4つの研究ユニットに分かれて実施している。平成19年度の活動を中心に、各研究ユニットの活動報告を以下に示す。なお、研究課題の後の人名の前の○印は、その責任者を示す。

ユニットA（基礎過程）：

平成19年度、Unit Aでは、計画課題と6件の公募課題を推進した。

計画課題「幸福感に関する基礎的研究－幸福感の科学をめざして」（代表：藤田和生）

本研究計画においては、感情の総合的研究である「感情科学 Affective Science」を一層発展させ、「心が活きる」とはどういうことか、有能感、達成感、生命感から構成される幸福感を達成するためにはどのような条件が必要なのかを明らかにするための基礎資料を、以下の5サブプロジェクトを推進することにより収集した。

1) 幸福感の発生（○藤田、子安、板倉）

幸福感を達成するための大きなカギの1つである感情の進化と発達を明らかにするための予備的研究をおこなった。フサオマキサルは、同種他個体の感情の原因を推理できることを示した。また食物分配においては他者の利益を気にかけることから、このサルには優しさやねたみといった高次感情が存在することを示した。乳児では、他者の分配行動に対する感受性の検討を、馴化法を用いておこなうべく、刺激映像を作成した。さらに、最後通告ゲームを利用して、こうした高次感情と行動の自己制御の過程を種比較・発達比較する研究を開始した。

2) 達成感に関する基礎的研究（○苧阪、櫻井、蘆田、齊藤）

学習と記憶、知覚、思考、動機づけとその神経基盤を、認知科学的、神経科学的に分析している。ワーキングメモリ（WM）課題の遂行に報酬期待や達成感が及ぼす影響をfMRIにより検討し、報酬期待と遂行の関係にはWM容量の個人差がかかわることがわかった。また、WM課題実行中に左背外側前頭前野に磁気パルス刺激（TMS）を与えると言語性WMの遂行が有意に低下することがわかった（苧阪）。WMの容量ではなく、どれだけ長く情報を保持できるかというWMの耐久性を測定する新テスト方法、ワーキングメモリピリオド（working memory period: WMP）の課題分析をおこなった。WMP得点とWMスパン課題の得点には高い相関があり、WMの容量と耐久性は相互に関連していることがわかった（齊藤）。動的な環境内にある目標物に対し手の到達運動を達成するためには、物体の位置を予測的に符号化する必要がある。ヒトを用いた研究から、刺激の輝度変化を含む視覚的運動情報がそのような予測に用いられていることがわかった（蘆田）。動的な環境内で目標点へ移動し到達するためには、その環境全体を符号化する必要がある。ラットを用いた研究から、環境内を探索する際、海馬の神経細胞で場所情報の変換と統合が行われていることが明らかになった（櫻井）。

3) 生命感に関する基礎的研究 (○吉川、楠見、桑原、岡田、平石、内田)

深い対話、相互の心理理解を促進する対話の特徴を明らかにすることを目的として、心理臨床場面（ロールプレイ）でのカウンセラー・クライアント間の対話の分析を行い、身体運動にみられる同調や、対話中の沈黙時間の生起、「深い発話」と相槌の関係等に関して、熟練のカウンセラーによる臨床対話の特長を明らかにした（吉川・桑原）。また、ネットワーク上の仮想環境を利用したコミュニケーション・システムを、がん患者のサポートグループに導入し、患者のメンタルヘルスとコミュニティの形成に及ぼす効果を解明すること目的として研究を行った。3年にわたる会話の感情語の出現頻度を分析した結果、コミュニティの成熟によって、発話の内容に質的な変化が見られ、不安・倦怠に関わる発言が減少し、快や親和に関わる発言が増加することを明らかにした（楠見）。

4) 有能感に関する基礎的研究 (○齋木、船橋、角野)

どのような研究を取り上げ、進めていくかを検討した。本課題では「複雑な外界に対して適切に対処できること」を「有能さ」の重要な側面ととらえ、この問題に焦点をあてて研究する。その中で、3つの具体的研究課題を設定した。第1に、この有能さの基盤となる注意機能、ワーキングメモリ機能の基礎研究を進める。特に、視覚的注意、視覚性ワーキングメモリに焦点をあてる。第2に、これらの機能の個人差に注目し、その背後にあるメカニズムを行動実験、機能的脳イメージング、行動・分子遺伝学的解析を併用して解明する。第3に、これらの機能の訓練に関する研究を進める。外界との有効な相互作用を可能にする注意や認知の機能、及び環境要因に関する基礎的研究をおこなう。その文化的、社会的、個体的差違やその障害（ADHD）に着目して、認知心理学、臨床心理学、神経科学などの多角的なアプローチを用いて解析する。

5) 幸福感の文化史・教育史 (○辻本、小山)

「現代における台湾先住民族の幸福感の調査」を主目的に、2008年3月7日～3月12日、辻本が教育学研究科在籍の大学院学生4人（PD1人を含む）を帯同して台湾調査に入った。台湾大学で開催の東アジア經典詮釋に関する国際シンポジウムに参加（辻本がパネラーとして発表）するとともに、台北中央研究院において文献的調査をした。その後、台湾中部の阿里山中に居住する鄒族の村に入り調査した。鄒族の現代社会への適応の現状、目指す方向、及び抱える課題について把握した。

公募課題1) 動物観と幸福感—日独におけるヒトと動物の関係の分析を通じて (○藤田、鈴木)

宗教的・文化的背景を著しく異にするが、自然への愛着という面では共通した傾向を示す日独において、動物とヒトとの関わり方と幸福感の関連性を探る試みを開始した。ベルリン自由大学との共同研究である。本年度は、コンパニオンアニマルとヒトとの関わりを探索する予備的質問紙調査を実施した。資料は現在分析中である。その結果に基づき、次年度には本調査を実施する。また異なる関係の中で構築され

る動物の知性や感情を実験的に分析することを計画している。

公募課題2) 知覚、認知、行為に対する文化の影響：実験心理学的アプローチ (○齋木、吉川、内田、Kitayama、Meyer、Rensink、Leaman)

本年度は、従来から継続しているマルチタスキングの文化比較実験をミシガン大学のメンバーを中心に論文にまとめて投稿し、現在審査中である。視覚探索の文化比較実験については、新たにブリティッシュコロンビア大学と共同で研究を開始し、予備的な実験を行ない、その結果について議論した。Rensink 教授との議論から「注意の解像度」に注目して今までの実験結果を整理し、いくつか追加実験を行なうことになった。その他、今年度はいくつかの新しいプロジェクトの可能性についてプロジェクトメンバーが海外の共同研究者と打ち合わせを行なった。

公募課題3) ワーキングメモリと注意に及ぼす情動脳の影響 (○荳阪、大塚、廣瀬)

本研究では、認知的側面を強調されてきたワーキングメモリと情動脳の関係を検討するために、情動脳として想定されている前部帯状回(anterior cingulate cortex: ACC)を含む辺縁系(limbic system: LS)がワーキングメモリを利用する際にどのように関わっているかを高齢者や若年者を対象に機能的磁気共鳴画像法(fMRI)によって検討し、その結果、若年者では一部のシステムに限定されているACCの影響が高齢者ではワーキングメモリのシステム全体に及んでいる可能性が示された。

公募課題4) 注意の制御メカニズムとその障害にみられる特徴に関する研究 (○船橋、齋木、山本、番、角野)

注意の制御メカニズムに関する脳機能画像による検討を進めるための基礎実験として、ヒトの脳における前頭眼野の位置の確定方法の確立を目指した。2人の実験協力者に、画面中央から周辺位置への眼球運動課題、注視点の注視課題、人差し指のタッピング課題をブロックごとに実施してもらい、この間の脳活動を fMRI で計測した。その結果、眼球運動時には上前頭溝と前中心溝の交点付近で顕著な活動が観察された。指タッピング課題時には前中心回の背側部で顕著な活動が観察された。眼球運動時と指タッピング時の活動部位を同一人で比較したところ、眼球運動関連領域は指運動関連領域の吻側でやや背側に位置し、両者は重ならない明確に異なる皮質領域を形成していることが明らかになった。

公募課題5) ユーモアの個体発生的起源に関する予備的検討 (○板倉、Rochat、Lee)

乳児におけるユーモアの理解に関する予備的検討をおこなった。12ヶ月児を対象に、透明、半透明、不透明のボードを用い、peek-a-boo ゲームをおこなった。実験者が、乳児と対面し、それぞれのボードで、顔を隠し、再度顔を見せるという一連の動作を3回繰り返した。実験者の動作と乳児の顔の合成画面を作成し、分析をおこなったところ、まだ予備的検討段階ではあるが、半透明のボードを使用したときに笑が多い印象を得た。現在、乳児の笑を引き出すと思われる別の刺激を作成中である。

公募課題6) Collaborative executive control に関する探索的研究 (○齊藤、Towse、Cheshire)

本プロジェクトでは、2者あるいは複数の個人が集まって、柔軟な集団行動を生成するために必要な、協同実行コントロールについて、探索的な検討を行った。具体的には、実行コントロールの働きを測定すると考えられている乱数生成課題 (random number generation task) を個人、あるいはペア (この場合、2者が交互に数字を生成する) で行い、生成された数字系列のランダムさを比較した。いくつかの指標でペアのランダムさの程度が高いことが示されたほか、日本と英国ではほぼ同じ傾向の結果が得られた。

ユニット B (システム) :

平成19年度、ユニット B では、企画課題と2件の公募課題を推進した。

計画課題「幸福感の国際比較」(BD 合同企画) (代表: B 杉本均・D 鈴木晶子)

ユニット D との共同企画である「幸福感の国際比較研究」は、心理幸福尺度班(○楠見、子安、中池、小島)、社会幸福尺度班 (○岩井、稲垣)、歴史・文化班 (○鈴木・駒込・佐藤・辻本・ベッカー・櫻井)、システム班 (○杉本、金子、高見、楠山) フィールド班 (○杉万、川崎、前平、渡邊) から構成され、幸福感に関する多角的な総合的研究を行ってきた。

○ブータン王国幸福感調査 (杉本・鈴木・辻本・櫻井)

本調査はユニット合同チームにおける歴史・文化班およびシステム班を中心として、幸福感や生活満足度に関する、日本との比較のうえで興味深い国・フィールドについて調査を行う企画である。特に、ブータン王国は先代国王による国家開発計画の中核概念として、「国民総幸福(Gross National Happiness)」を提唱し、既存の物質的繁栄や経済的成長を中心とした開発を否定し、仏教に根ざし、ブータン文化に立脚した持続的発展と近代化の方向を模索している点で幸福感研究にとって重要な国である。GNH の実現を目指して、2005 年から 2008 年にかけてブータン中央研究所 (Centre for Bhutan Studies) を中心に GNH インデックスの作成が試みられている。2008 年 2 月には阪大学大学院人間科学研究科・草郷孝好准教授を招き、「繁栄と幸福に関する開発研究: ブータン王国などの事例から」と題する講演会を行った。そして、2008 年 10 月には、現地調査に入っている。

○幸福感に関する比較教育学的アプローチ (杉本他院生)

幸福感や生活満足度に関してどのような研究があり、どのような研究方法をとっているのか、また教育研究と幸福感研究にはどのような関係があるかなどについて、アメリカ、英国、インドなどについて専門国・地域にわかれて研究レビューを行った。アメリカにおける幸福感の教育研究は、自尊心、自信、連帯感、言語能力などに関連した肯定的トピックが多いのに対して、日本の比較教育学研究には、環境、いじめ、非行、不登校、校内暴力をキー概念として用いた研究が多いことがわかつ

た。またオランダ・エラスムス大学の Veenhoven 教授が構築した幸福感に関する世界幸福データベース (World Database of Happiness)、世界価値調査(1990 年～4 回)における地域バロメータ、Springer Netherlands 発行の「幸福感に関する研究 (Journal of Happiness Studies)」などについてレビューを行った。また 2008 年 2 月には、英国 Boxgrove Primary School 教員交流講演会「教員の幸福感一日英比較」を開催した。

公募課題 1) 「e-learning と学習者間インタラクションを通した高次リテラシーの育成」 (○楠見、大塚、吉川、中池、久保、小島)

専門英語の授業における e-learning システム moodle と VR コミュニケーションシステム 3D-IES を用いた英語コミュニケーション能力の育成、心理学基礎演習の授業における Jigsaw 法やグループ討論を通した心理学リテラシーの育成について実践研究をおこない、学習活動の事前・事後の変化について明らかにした(楠見)。

カリキュラム設計論の一つである「逆向き設計」論をベースに教育工学における複数の情報技術を適用したカリキュラムを設計・検討した。具体的には、リアルな文脈の中で知識やスキルを総合的に使いこなすことを求める課題であるパフォーマンス課題とその評価指標であるルーブリックの作成・改善を通して、評価にもとづくカリキュラムを検討した(中池)。

第 3 に、英語・独語の前置詞と、そこから派生する空間表現語などの理解及び活用を支援する VR による CALL 教材を開発し、その学習効果を実験的に検討した。また、教材のユーザビリティと被験者のコンピュータリテラシーの関係なども検討した(小島)。

公募課題 2) 「算数・数学学習におけるつまずきの克服に関する国際的比較研究」
(○田中耕治・杉本均・楠見孝・楠山研)

2007 年 12 月に、日中教育課程改革検討会の一部として「PISA 調査の特徴と課題—日中合同検討会」を開催し、楠見孝(京都大学)「PISA の経験と日本」内村浩(京都工芸繊維大学)「国際学力調査から見えること—科学的リテラシーを中心に」胡軍(中国・中央教育科学研究所)により「2006~2009 国家重要課題—小中学生における学力調査研究の概要」の講演会を行った。

2008 年 3 月には中国山西省調査(北京・大同・平遥)を行い、太原市の通宝育傑学校(私立)にて算数授業(小学校 4 年)、発見学習(小学校 5 年)、数学授業(中学校 3 年)などの授業観察を行った後、授業検討会を開催した。平成 20 年度においては、中国や韓国との教育評価改革における交流、ならびに、算数・数学的技能の実生活での応用能力や創造的発展性において評価の高い北欧諸国でフィールド調査を実施する。

ユニット C (サポート) :

平成 19 年度、Unit C では、計画課題と 6 件の公募課題を推進した。

計画課題 1. 「個の成長と幸福のための教育：教育学と心理学の学際的国際交流プロジェクト」（○斉藤直子）

2008年3月に、ロンドン大学教育研究所（IoE）と京都大学大学院教育学研究科（京大）の学術・学生交流がロンドン大学で行なわれた。これは、参加者数50人近くが集う国際会議で、IoE側14人と京大側11人の教員、研究員、大学院生が英語による発表と活発な質疑応答が2日間に渡り行われた。これに先立って、2008年2月に、IoEのスタンディッシュ教授（Prof. Paul Standish）による講演「危機にある批判的思考（Critical Thinking in Crisis）」ならびに「読むこと・書くこと・語ること（Reading, Writing and Narrative）」、参加大学院生の英語プレゼンテーションとディスカッション、同教授による発表指導が行なわれた。

研究課題 2. 「心が生きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」（○山田洋子）

3つの新しい観点「ポリフォニック・フィールド」「クロノ・トポス」「協働の対話的学び」から、国際的・地域的に多フィールドで実践研究し、多様な人々が生き生きと暮らせるための国際教育、地域教育、生涯発達を支援する、サポートとシステムづくりのモデルを提案している。

2007年度は、ウィーン大学からヨーロッパ発達心理学会長 Prof. Spiel, Dr. Spiel および Dr. Strohmeier, Dr. Grabner の4人の心理学者を招聘し、“Kyoto-Vienna International Lectures: Life-Span Development and Life Long Learning” ならびに “Bildung-Psychology: A developmental perspective on education” と題した2つの国際講演会、および若手研究者と大学院生を中心とした「多文化研究の国際ワークショップ：京都大学とウィーン大学の共同研究会」を開催した。

研究課題 3. 「臨床における物語ることの意味」（○皆藤章）

「物語」といテーマに関して、それが心理臨床の学として位置づく在りようを、ナラティブセラピーも含めて広く心理臨床の実践をサーベイしながら、新たな試みとして自身の active imagination 体験を通して心理臨床における「物語」の生成について研究を行い、論文を発表した。

研究課題 4. 「学校臨床における教育モデルと臨床モデルの違いと国際比較」

（○大山泰宏）

日本とスイスにおける、教師とカウンセラーに対して行った調査のデータ分析を行い、投稿の準備を行った。日本で非常にはっきりと認められた教育モデルと臨床モデルの違いが、ややスイスでははっきりとせず、カウンセラーも教師的な視点ももっていることが言えそうである。

3月にスイスのチューリッヒ教育大学を訪れ、今後の調査の打ち合わせを行った。

研究課題 5. 「特殊環境における心理的サポート —南極越冬隊員の心理に関する研究—」（○桑原知子）

本研究は、閉鎖環境におけるヒトの心理的状态を適切に評価する手法を提言する

とともに、閉鎖環境で活動するヒトが危機的状況に陥らずにすむための予防的「サポート」、あるいは、実際に破綻してしまったときにはそれを回復させる緊急「サポート」の方法を確立しようとするものである。平成 19 年度においては、第 49 次南極越冬隊への質問紙調査に加え、帰国後の隊員を対象とした面接調査を行った。また、5 年分の南極越冬隊の調査データの整理と分析を引き続きおこなった。今後は、閉鎖環境に対するサポートとして、テレビ電話を介した遠隔カウンセリングの技法開発にも取り組んでいく。

研究課題 6. 「発達障害への心理臨床的アプローチ」 (○河合俊雄)

発達障害に関して、京都大学の心理教育相談室を中心とした心理療法では、子ども・大人の発達障害に対して、心理療法が行われ、成果をあげている。しかしながら、この事実や知識が、事例研究を中心としているために、一般にはあまり伝えられていない。そこでこのプロジェクトでは、事例検討会から、発達障害に対しての心理療法のエッセンスを把握し、専門家・一般の両方に向けて発信することを目指している。19 年度においては、いずれもやや軽症の子どもの発達障害についての 2 回の事例検討会を行い、またそのうちの 1 回は十一元三教授（京都大学医学部）を外部の専門家として招いた。

ユニット D (開発評価) :

ユニット D は大きくわけて、幸福感の学際的国際比較研究の企画実施と、FD・教育改善におけるオルタナティブ・モデルの構想の一貫として「心が活きる教育」のための FD・教育改善とその評価の実施という二つの研究課題を有する。

計画課題 1. 幸福感の国際比較研究に向けた比較尺度設定のための予備研究

(○子安増生、カール・ベッカー、鈴木晶子、櫻井理穂)

普遍的な幸福感と文化や宗教固有の幸福感に関する国際比較調査実施に向けて、過去に行われた幸福感や QOL (Quality of Life) に関する調査に関する資料を収集し検討した。WHO、ユネスコ他、国際機関や海外の大学で行われた幸福感調査に関するデータの収集および調査を行った。

また、ベルリン自由大学との共同研究を開始した。共同研究に向けての双方の研究関心と方向性についてすり合わせるために、ベルリン自由大学のクリストフ・ヴルフ教授ほか 3 人のドイツ人研究者による国際シンポジウム「幸福とリスク」を 2 月日に行い、幸福概念をリスク・マネジメントやリスク・パフォーマンスとの連関のうちに見ていくための今後の共同研究の可能性について検討を加えた。教育哲学、臨床心理学、人間学、社会学など様々なアプローチ方法を有する隣接諸科学がフィールドを共有しつつ行う、学際的な研究の体制、組織、方法についても検討した。

平成 20 年度には、パイロット調査として、日本とドイツの学校および家庭に入っているフィールドワークを行う。日独でそれぞれの国のフィールドを共有しつつ、聞き取り調査、映像記録による分析といった質的方法論を介して行う調査では、ク

リスマスや正月など、それぞれの国の代表的な年中行事の時期に集中的に家庭や学校に入る。

計画課題 2. FD・教育改善におけるオルターナティブ・モデルの構想

－「心が活きる教育」のための FD・教育改善とその評価

(○田中每実、松下佳代、大塚雄作、大山泰宏、溝上慎一、酒井博之)

本プロジェクトは、大学教育における工学的経営学的モデルへのオルターナティブを構想し、「心が活きる教育」のための FD・教育改善のあり方を探究することをめざしている。その中核的概念と位置づけているのは、「相互研修型 FD (mutual faculty development)」である。相互性の形態には、教員－学生間の相互性、教員間の相互性、組織（部局・大学）間の相互性がある。

平成 19 年度は、関西地区 FD 連絡協議会の設立準備に向けて活動した。関西地区の大学の FD に対するニーズをさぐるため、「FD に関する実態とニーズ調査」を実施した。対象となったのは、138 大学・71 短大、計 209 大学であり、83 大学・34 短大、計 117 大学より回答を得た（回収率 56.0%）。さらに、このニーズ調査の結果を受けて、平成 20 年 1 月には「第 1 回授業評価ワークショップ」を立命館大学において実施し、関西地区の 53 大学が参加した。

1. 2. ユニット研究の自己点検・評価

ユニットのそれぞれの研究は「自律・分散・協調」の原則に従って各ユニットおよびその中の研究班ごとに多様な研究活動が展開されてきている。自律的分散的活動は活発に行われているが、協調的活動（研究のコラボレーション）はむしろこれからの課題である。

協調的活動の取り組みの一つとして、平成 19 年度には、グローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」を 11 月に開催した。12 人のメンバー（子安、杉万、辻本、西平、藤田、齊藤智、渡邊、齋藤直、山田、大山、杉本、鈴木）が自身の研究経歴・研究内容を紹介し、それを「心が活きる教育」とどのように結び付けていくかを論じた。学内外から 79 人の参加者があった。また、ポスターセッションにおいて、拠点の大学院生を中心に 34 件の発表があった。心理学と教育学という異なる研究領域が今後どのようにコラボレーションを行っていけばよいかを考える貴重な機会となった。

また、平成 20 年度のコラボレーション活動の一つとして、一般読者向け図書『心が活きる教育－リスク社会と幸福感』（仮題）を編集し、ナカニシヤ出版を通じて公刊する企画を進めている。本書は、四六判横書、200 ページ、2009 年 3 月末刊行の予定である。内容は、8 つの章と 12 のコラムから構成され、執筆者はすべて拠点のメンバーである。

以上のように、研究のコラボレーションはその実をあげはじめている。

1. 3. 国際的ネットワークの形成

申請書に記載した海外の研究機関との研究交流は、以下のように進捗している。

(1) 米ミシガン大学：大学間学術交流協定に基づく研究を推進している。「幸福感の比較文化研究」を行っているミシガン大学・北山忍教授（社会心理学）との連携は、内田由紀子助教（こころの未来研究センター）を中心に行っている。

(2) 英ランカスター大学：教育学研究科との部局間学術交流協定に基づき、実行機能の発達の国際共同研究を推進している。2007年12月に、京都大学教育研究振興財団の協力も得て、国際シンポジウム「International Symposium on Executive Function in the Mind」を京都大学で開催した（企画：子安・齊藤智・大塚）。

(3) 中国中央教育科学研究所：教育学研究科との部局間学術交流協定に基づき、「日中の学力実態に関する比較調査」を共同で実施している。2007年12月に、胡軍教授（中国・中央教育科学研究所）の参加を得て、「PISA 調査の特徴と課題—日中合同検討会」を開催した。

(4) 中国北京師範大学：部局間学術交流協定に基づく共同研究を推進している。石中英教授（北京師範大学）の参加のもと、国際シンポジウム「東アジアの教育伝統と近代教育（学）—日本・韓国・中国の場合—」を2008年8月に京都大学で開催した。

(5) 独ベルリン自由大学：ベルリン自由大学のクリストフ・ヴルフ教授とユルゲン・ケルナー教授ほかの研究者を招聘し、国際シンポジウム「幸福とリスク」を2008年2月に京都大学で開催した。

(6) 英ロンドン大学教育研究所（IoE）：2008年2月にIoEのスタンディッシュ教授による2つの講演会を京都大学で開催した。2008年3月には、IoEにおいて国際シンポジウム「Self, other & language」を開催した。IoE側14人と京大側11人の教員、研究員、大学院生が英語による発表と活発な質疑応答が行なわれた。また、両者の間に部局間協定を結ぶ計画が進行している。

1. 3. 国際ネットワーク形成の自己点検・評価

以上のように、グローバル COE の国際的拠点となるべき海外研究機関との相互連携活動は順調に進んでいる。次の課題は、個別の期間を超えた研究ネットワークの形成である。この目的のため、拠点の活動内容を紹介するグローバル COE のホームページの主要部分を英文化している (<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/en/>)。また、研究ネットワークの形成に必要な人材を確保するため、COE 助教の国際公募を実施し、ドイツ人研究者 Dr. ループレヒト・マッティク（ベルリン自由大学修了）の採用を決めた。マッティク助教の着任時期は、2008年11月である。また、幸福感の国際比較研究のメンバーには拠点の外国人研究者が4人参加している（ベッカー教授、ダルスキー准教授、キルク助教、マッティク助教）。

2. 教育活動の自己点検・評価

グローバル COE では、「研究の国際化」と並んで「人材育成」が重要な課題とされる。本拠点では、「心が活きる教育」ということについて、心理学・教育学の観点から深く考えることのできる高度の専門性と幅広い視野を持ち、外国語による論文の投稿や国際学会での発表など、国際的に情報発信ができる人材を育成することを目指し、心理学・教育学の大学院教育を拠点全体で担う教育体制を整備・充実することを目標に掲げた。心理学と教育学は、日本学術会議でも一つの分科会（心理学・教育学委員会）を構成しているが、一般的には、研究活動だけでなく教育活動においても、分野間の連携が活発であるとは必ずしも言えない。本拠点は、部局単位ではなく京都大学全体として実施する心理学・教育学の充実したカリキュラムのもとで、幅広く学際的に学び、かつ深く専門的に研究を行うことによって博士の学位を取得する修了者が増える方策を実現しようとしている。本拠点における人材育成のために実施する教育プログラムとその実際の進行状況は、以下の通りである。

Ⅰ. 専攻を超えた研究指導体制

目標：専攻や課程の壁を越えて幅広い視野を持つ研究者を養成するために、カリキュラム編成と論文指導体制の整備を拠点全体で行う。

現在までの成果：「研究開発コロキウム」と「国際研究フロンティア」（授業）という2つの教育プログラムを実施している。

「研究開発コロキウム」とは、博士課程院生が代表者となり本拠点の研究目的に関連するテーマに関わって企画する、専攻や講座・専修の壁を越えた優れた共同研究計画に対して COE 助成金を与え、代表者が修士課程院生・学部学生を受講者とする授業として研究を実施するものである（19年度は後期のみ開講、20年度からは前期・後期開講）。ただし、最終的な単位認定は指導教員が行う。19年度は「募集人員 10 件程度、申請額は 1 件 50 万円以内」として公募を行い、23 件の応募の中から、厳正な審査により 8 件を採択した。20年度は、「最大 10 件、申請額は 1 件 50 万円以内」として募集し、15 件の応募のすべてを採択とした。

さらに、平成 20 年度から、教育学研究科に研究者養成コース共通科目「国際研究フロンティア」を新設した。20 年度開講科目は、次の 3 科目であった。

- ・国際研究フロンティア A：担当は、エマニュエル・マナロ（ニュージーランド、オークランド大学）・子安増生、英語による授業。
- ・国際研究フロンティア B：担当は、田慧生（中国、中央教育科学研究所）・高峽（中国、中央教育科学研究所）・田中耕治、中国語による授業。
- ・国際研究フロンティア C：担当は、ポール・スタンディッシュ（英国、ロンドン大学教育研究所）・齋藤直子、英語による授業。

いずれも外国人研究者による授業というだけでなく、分野を越えた受講生を前提としている。平成 21 年度には、韓国語を加え、5 科目を開講する予定である。

Ⅱ. EXラボによる有機的連携

目標：研究室相互訪問など、心理学・教育学の大学院生が共同して参画する“Exchanging Laboratory Program”（EX ラボ）を実施する。

現在までの成果：平成20年度から、大学院修士課程1年生を主要対象に（上級学年も任意参加が可能）、EX ラボを開始した。下記の5プログラムを実施し、参加者は45人、そのうち修士課程1年生は約7割にあたる38人が参加した。なお、参加に必要な経費は、グローバルCOEで負担している。

- ・「大学院生のための教育実践講座 2008—大学でどう教えるか」（高等教育研究開発推進センター；8月）。
- ・「野殿・童仙房フィールド研究体験」（教育学研究科；9月）。定員10人。
- ・「視覚科学の実験体験ツアー」（人間・環境学研究科；9月）。定員15人。
- ・「藤田研究室見学～比較認知科学への招待～」（文学研究科；9月）。定員15人。
- ・「風景構成法と箱庭療法」（教育学研究科；9月）。定員10人。

Ⅲ. 研究の国際化および国際的情報発信

目標：世界的研究機関との学術交流協定等に基づく留学を支援し、国際学術誌投稿と国際学会発表をサポートする。日本国内と海外の数大学に呼びかけて招聘した大学院生・ポスドクを含めた国際若手ワークショップを実施する。

現在までの成果：大学院博士課程在籍の大学院学生を対象に「海外留学資金」を用意した。留学先の指導教授の受け入れ許可を得ていることが応募条件である。

平成19年度は、募集人員最大20人（審査適格の者のみ採択）、申請額60万円以内の条件で公募し、応募者6人のうち5人を採用した。留学先の機関は、米国・タフツ大学及びマイアミ大学、米国・北イリノイ大学、英国・オックスフォード大学、英国・マンチェスター大学、オーストラリア・国際教育センターである。

平成20年度も募集人員最大20人、申請額60万円以内の条件で公募し、申請者9人全員を審査適格として採用した。留学先の機関は、米国・ボストンカレッジ、米国・北イリノイ大学、米国・サーチ・インスティテュート、ブラジル・アシヌ自然林、英国・マンチェスター大学、フランス・パリ高等師範学校、韓国・ソウル大学、中国・北京師範大学、タイ・ナレスウェン大学である。

海外の研究機関から招聘した大学院生・ポスドクなどを含む国際若手ワークショップとしては、2007年12月に開催した「International symposium on executive function in the mind」の初日に「International Seminar for Young Psychologists on Cognitive and Developmental Sciences」を開催した。参加者は、日本側6人、英国側2人であった。

Ⅳ. ポスドク・プログラム

目標：ポスドク研究員（10人）を公募により採用するが、その公募対象を海外の研究機関に在籍あるいは修了の外国人にも拡大する。

現在までの成果：日本学術振興会特別研究員（PD）に準じた研究員10人を公

募により採用する計画であったが、予算交付額が申請額の約半分（間接経費を加えると約3分の2）になったため、採用枠を4人（A～Dの各ユニット1人ずつ）に減らさざるをえなくなった。全国公募により4人を「COE 研究員」として採用した。その出身大学（最終学歴）は、京都大学教育学研究科2人、同文学研究科1人、ペンシルヴァニア州立大学大学院1人である。

V. 大学院修了後キャリア形成プログラム

目標：①大学などの研究機関だけでなく、官庁の心理学・教育学関連職や、シンクタンクなどの民間企業、各種医療関連職に就職できるようサポートをする、②リサーチアシスタント（30人）を採用する、③大学院生に対する競争的研究経費の支援を行う、④国際的公募による助教（5人）を採用する、および、⑤テニユア取得以前あるいはテニユア取得からまだ年数の浅い30歳代の若手教員に対して競争的研究費の支援等を行う。

現在までの成果：5つの目標のそれぞれについて順にみていく。

①大学などの研究機関だけでなく、官庁の心理学・教育学関連職や、シンクタンクなどの民間企業、各種医療関連職に就職できるようサポートをする事業の第1回として、惣脇宏・文部科学省生涯学習政策局生涯学習総括官（前国立教育政策研究所次長）を講師に迎え、大学院修了後キャリア形成プログラム講演会「教育研究と政策をつなぐ」を2008年9月に開催した。出席者は27人であった。

②当初予定していた「リサーチアシスタント（30人）の採用」については、京都大学で実施可能なリサーチアシスタントは経費支給限度額の上限設定が低かった（その後改善された）ので、「院生養成プログラム研究費」等の費目に切り替えて実施するように変更した（次項に詳述）。

③大学院生に対する競争的研究経費として、院生養成プログラム研究費は、大学院博士課程在籍者（休学中を除く）を対象に、科学研究費に準ずる形式で大学院生の個別研究プロジェクトを支援するものである。19年度は、募集人員20人程度、申請額は「1件30万円以内または50万円以内（国際学会発表を含む場合）」という条件で募集した。その結果、16件の応募があり、育成支援委員会で厳正かつ公正に審査を行い、最終的に執行委員会において14件の採択を決定した。また、20年度は、「募集人員20人程度。申請額は1件30万円以内。ただし、外国学会で発表を行う場合、その採択の書類がある場合は、航空運賃実費分（上限15万円）を加えた申請が可能」と変更して募集した。30件の応募があり、厳正な審査の結果20件の採択を決定した。

④国際的公募による助教の採用（5人）については、拠点に対する交付金額が申請額の約半分（間接経費を入れると約3分の2）であったため、助教の採用枠を3人に減らさざるを得なくなった。そのうち2人は全国公募を行って採用した。応募者の中には外国籍の者もあった。審査の結果採用された助教の出身大学（最終学歴）は、京都大学教育学研究科1人、同文学研究科1人である。また、助教

の国際公募は実質的に 20 年度になってから行い、ドイツ人の若手研究者 1 人を助教として採用した（20 年 11 月着任）。

⑤テニユア取得以前あるいはテニユア取得からまだ年数の浅い 30 歳代の若手教員に対して競争的研究費を「若手教員支援経費」として公募し、審査の結果研究費を給付した。平成 19 年度は「5 人程度、申請額は 1 件 80 万円以内」として公募し、応募者 9 人の中から 5 人を採択した（その所属は、教育学研究科 4 人、高等教育センター 1 人）。同 20 年度は、「10 人程度、申請額は 1 件 50 万円以内」として公募し、応募者 9 人、採択 9 人（教育学研究科 5 人、高等教育センター 2 人、人間・環境学研究科 1 人、こころの未来研究センター 1 人）であった。

2. 教育活動の自己点検・評価

人材育成は、本拠点として最も力を入れて取り組んでいる課題であり、拠点に対する実際の研究費交付金額が大幅減であった中でも、最大限の取り組みの努力を行っている。

専攻や課程の壁を越えて幅広い視野を持つ研究者を養成するために実施している「研究開発コロキウム」、「国際研究フロンティア」、「EX ラボ」という新たな教育プログラムを実施している。この 3 つの教育プログラムは、グローバル COE が本来大学院博士課程の院生を対象とするものであるという条件の中で、博士課程の院生の力を借りて修士課程からの大学院教育を充実させる取り組みでもある。

博士課程の院生に対しては、「海外留学資金」「院生養成プログラム研究費」「研究開発コロキウム」という 3 つの競争的資金（拠点内公募）によって、院生の活動をサポートしている。すなわち、「留学」・「研究」・「教育」という 3 つのカテゴリーの中から、院生自身のおかれている状況と必要性に応じて適切なものを選択できるようになっている点が特徴である。また、院生を対象とする説明会をこれまで 4 回（2007 年 7 月、10 月、2008 年 2 月、4 月）にわたって開催し、上記の公募の趣旨と内容の周知に努めてきた。

30 歳代の若手教員（助教クラス）に対する競争的研究費の支援は、「若手教員支援経費」として拠点内公募を行い、19 年度 5 人、20 年度 9 人に研究費を給付した。COE 助教は別として、拠点の助教には、グローバル COE に関する職務は課さず、研究費と研究機会の提供を行っている。

以上のように、教育活動に関しては、全体として順調に推移して入る。ただし、公募の中には、応募数が募集人員に満たないものもあり、今後募集内容や募集人員の妥当性を検討する必要がある。また、今後の課題として取り組むべきことに、外国の研究機関に所属する大学院生やポスドクの招聘・交流事業を一層活性化することがあげられる。とりわけ、国際若手ワークショップの開催を拠点全体で取り組んでいくことが必要である。

3. 社会連携および広報活動の自己点検・評価

本プロジェクトは、各種教育機関（京都府・京都市の教育委員会、小・中・高等学校、総合教育センター等）、司法機関（京都家庭裁判所等）、医療機関（京都大学医学部附属病院等）、その他府下の過疎地域活性化事業や子育て支援事業等との連携・協力関係を深め、本プログラムの成果は中・高生にも理解しうる形で世の中に公開され、心と社会の諸問題についての研究成果が分かりやすく親しみやすい形で広く社会に還元することを目標としている。

教育機関との社会連携には、教育学研究科の「教育実践コラボレーションセンター」（センター長・田中耕治教授）との連携による次のような活動がある。なお、同センターのメンバーは、全員グローバル COE に参加している。

(1) 京都市立高倉小学校における取り組み：「確かな学力」を育成するため、拠点の教員・院生が授業観察を行い、授業計画や授業の振り返りを教師とともにやっている。

(2) 寝屋川市立田井小学校における取り組み：拠点の教員・院生による共同研究グループは、寝屋川市立田井小学校と連携して、授業設計の段階から関わり、研究授業と事後の研究協議会への参加を行っている。

(3) 京都市立洛風中学校における取り組み：洛風中学校は特区制度を利用して2004年に開校した不登校の子どものための学校である。京都市教育委員会から同校運営協力の依頼を受け、拠点の教員・院生が、同校の教員とともに、学校運営を考え、助言を行なってきた。

(4) 滋賀県立膳所高等学校における取り組み：教員・院生が膳所高等学校国語科の教員共同研究グループを作り、批判的思考力育成の教育実践研究を進めてきた。批判的読解指導と協調学習に基づく国語科授業実践の授業観察と検討、単元の事前と事後の生徒評価の実施と分析、授業における談話過程の分析、ミーティング、学会発表などを行っている。

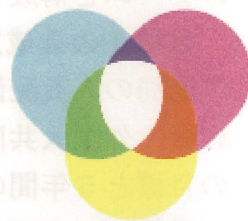
(5) 野殿・童仙房での生涯学習の取り組み：京都府で唯一の「村」である相楽郡南山城村の童仙房地区全体をフィールドとし、住民との協働で新しい教育空間を創造する試みを行っている。前述のように、平成20年度の「EX ラボ」の協力拠点にもなっている。

次に、グローバル COE 間の連携協力体制として、学内のグローバル COE プログラム推進委員会に参加するとともに、慶應義塾大学グローバル COE 「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」（拠点リーダー・渡辺茂教授）と協力して事業を進めていくことを決定し、2008年1月に東京で開催されたシンポジウムに共催・参加した。また、2009年1月には京都において、医療人類学者の協力を得て、慶應義塾大学と共催のシンポジウムを開催する。さらに、2008年2月に本学で開催された日本学術会議シンポジウム「ゲノムから心まで一心の先端研究拠点への展望」

などにも後援団体として連携協力を行った。

社会連携・広報活動にとって重要な柱は、拠点のホームページ（ウェブページ）である。日本語ページ（<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>）だけでなく、英文ページも充実させている（<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/en/>）。

本拠点のホームページは、本学の学術情報センターコンテンツ作成室の協力（有償）によって作成した。シンボルマーク（右図）は、本拠点のテーマである、有能感・達成感・生命感が合わさって幸福感（心が活きる状態）が生まれる様子を、3つの色が重なり合い中心に白い空間が生まれることで表現している。このデザインは、学術情報メディアセンター奥村昭夫教授（客員）によるものである。奥村教授は、ロート製薬やグリコの CI、月桂冠・田辺製薬・牛乳石鹸・近鉄百貨店などのパッケージデザインなどを手がけた著名グラフィックデザイナーである。



また、広報委員会は、拠点の広報に関する原則を議論し、印刷物でなくウェブページの充実を通じて広報を行うことを方針として決定した。この方針を受けて、メンバーの紹介、講演・シンポジウム・ワークショップの案内、拠点のニュースなどすべての広報すべき情報をウェブページで公表している。また、英語に堪能な COE 研究員が日本語のウェブページに対応する英語のページの更新を日常的に行い、両者の差を少なくするように努めている。

3. 社会連携および広報活動の自己点検・評価

社会連携のうち、教育機関との連携は、教育学研究科の教育実践コラボレーションセンターとの緊密な協力のもとに活動を行っている。このほか、司法機関や医療機関との連携も順調に進めている。

慶應義塾大学グローバル COE「論理と感性の先端的教育研究拠点形成」との連携も2回のシンポジウムの共催を通じて順調に進んでいる。

拠点の広報活動は、ウェブページの充実を通じて行うことを方針とし、日本語および英語のウェブページを充実させている。

拠点の広報活動の一環として、一般読者向け図書『心が活きる教育ーリスク社会と幸福感』（仮題）を編集し、ナカニシヤ出版を通じて公刊する企画を進めている。拠点のメンバーが執筆者となり、2009年3月末刊行の予定である。

今後の課題として、市民講座のような形式を通じての社会連携・広報活動の充実についても検討し実施していく必要がある。

4. 平成19年度および20年度の活動の自己点検・評価

本報告書の12～13ページに年度別の事業計画を示している。その達成度を以下に検証する。

平成 19 年度：

目標 1：プログラム全体の研究基盤の整備・形成を行う。まず、執行委員会と下部の 5 委員会、4 研究ユニットを立ち上げ、COE 事務局の人員配置を行う。助教、ポスドク研究員、リサーチアシスタントの公募ならびに採用手続きを推進する。4 つの研究ユニットごとに、教員、外国人共同研究者、ポスドク、大学院生のチームを構成し、各年の短年度の目標と 5 年間の長期的目標を策定する。

目標 1 の達成度：目標 1 にかかげた委員会の整備、助教、COE 研究員、COE 事務局の人員配置（専任の事務員 2 人体制）を行い、4 つの研究ユニットごとに教員、外国人共同研究者、ポスドク、大学院生のチームを構成し、各年の短年度の目標と 5 年間の長期的目標を策定しており、目標 1 は達成した。

目標 2：心理学と教育学の融合科学としての基盤を強固にするため、有能感、生命感、達成感、幸福感という 4 概念の思想史的検討ならびに実証研究における操作的概念としての検討、社会システムとの関連から上記 4 概念の機能についての検討、心理臨床・教育臨床における 4 概念の意味づけの検討を開始し、国際比較研究にむけての準備を行う。

目標 2 の達成度：11 月に開催したグローバル COE 拠点形成記念公開シンポジウム「心が活きる教育に向かって」は、有能感、生命感、達成感、幸福感という 4 概念の思想史的検討ならびに実証研究における操作的概念としての検討などの点で有意義であった。また、心理学と教育学という異なる研究領域が今後どのようにコラボレーションを行っていけばよいかを考える貴重な機会となった。テーマの共通性が理解されるとともに、方法論の多様性を尊重することが大切であることが確認された。

目標 3：また、「基礎過程」と「システム」の 2 つの研究ユニットで国際ワークショップを開催する。

目標 3 の達成度：平成 19 年度には 4 つの大きな国際シンポジウムを実施した。

- 「PISA 調査の特徴と課題一日中合同検討会」（2007 年 12 月、中国・中央教育科学研究所の研究者を招聘）：ユニット B 主催。
 - 「International symposium on executive function in the mind」（2007 年 12 月、イギリス・ランカスター大学ほかの研究者を招聘）：ユニット A 主催。
 - 「Happiness and risk」（2008 年 2 月、ドイツ・ベルリン自由大学ほかの研究者を招聘）：ユニット D 主催。
 - 「The self, the other & language」（2008 年 3 月；イギリス・ロンドン大学教育研究所に大学院生 7 人を帯同し開催）：ユニット C 主催。
- すなわち、各ユニットで一つずつ国際シンポジウムを実施しており、目標以上の活動を行ったと言える。

平成 20 年度：

目標 1： 4つのユニットの研究機能を集約し、4概念の相互連関を分析していくための、危機的状況に対処する際の心の働きについて多角的にアプローチするための作業概念として「リスク・マネジメント」と「リスク・パフォーマンス」を設定し、具体的な研究を実施していく。

目標 1 の達成度： 次の 2 つの計画が順調に進行している。

①家庭や学校において、子どもや子どもを取り囲む人間関係における幸福感とリスク感覚をエスノメソドロジーの手法、語り分析、映像分析を通して行う。本年 12 月に日本チーム（河合、鈴木、マッテイク）が 2 回にわたりドイツ・ベルリンの小学校や家庭に入り調査し、また 1 月にはドイツ・チーム（ヴルフ、ツィルファス、ケラーマン各教授）が来日し、日本の小学校や家庭で調査を行う。1 月には 3 日間のワークショップを開催する。

②経営学の分野でのリスク・マネジメントの問題を日本とドイツそれぞれのフィールドにおいて予備調査を行う。ドイツでの調査はドイツ人研究者（経営学）に頼り、日本での調査は、関西経済同友会の協力のもとに 2008 年 1 月に実施する。

目標 2： 幸福感の国際比較研究に必要な尺度を構成するため、予備調査を実施しデータを分析する。また、国際調査で不可欠な調査項目の翻訳（バック・トランスレーションを含む）をこの年度に済ませておく。

目標 2 の達成度： 幸福感尺度検討会発足させ、これまで 3 度会合を開いて調査項目の選定ならびにその翻訳作業（英語、スペイン語、中国など）を進めている。

目標 3： 「サポート」と「開発評価」の研究ユニットで国際ワークショップを実施する。

目標 3 の達成度： 「サポート」については 3 人のアメリカ人研究者を招聘し、国際シンポジウム「日本の FD の未来 —Building the core in faculty development—」を 2009 年 1 月に京都大学で開催する予定である。

目標 4： 年度終了後に本プログラムの中間評価を受けるため、「自己点検・評価部会」を構成し、自己点検・評価中間報告書を作成の上、研究の進捗と人材育成の両面から外部評価を受ける。

目標 4 の達成度： 外部評価の作業は、京都大学の外部の心理学者 3 人、教育学者 3 人の協力を得てこれから進めるところである。

4. 平成 19 年度および 20 年度の活動の自己点検・評価

平成 19 年度は、初年度であるため実施期間が短く、また白紙の状態から運営体制を固めつつ進まざるをえなかったが、所定の目標はあらかじめ達成できたと認識している。

平成 20 年度は、現在進行中、あるいはこれから達成すべき事項が多いが、所定の目標はほぼすべて達成できるものと考えている。

4. 外部評価の結果

本章の次ページ以後では、下記の6人の委員の先生方から寄せられた報告書の全文をそのまま掲載する。掲載の順序は、ご氏名の五十音順である。ごく僅かに見られた誤字など一部の点において修正を行ったほかは、基本的に原文のままである。なお、送付した外部評価用スコアシートでは「お名前」「ご所属」「ご記入日」としていたが、「お」と「ご」を消して返信された先生が多いので、以下では単に「名前」「所属」「記入日」としている。

安藤寿康・慶應義塾大学教授

安彦忠彦・早稲田大学教授

小松郁夫・玉川大学教授

野島一彦・九州大学教授

長谷川寿一・東京大学教授

松浦良充・慶應義塾大学教授

外部評価用スコアシート

文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

(拠点番号： D-08、拠点リーダー：子安増生（京都大学教育学研究科）)

名 前： 安藤 寿康

所 属： 慶應義塾大学文学部教授

記入日： 2008 年 12 月 15 日

お送りした資料に基づいて評価をお願いいたします。各項目について、5 段階のいずれか一つに○をお付け下さい。

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
☒ 優れている
☐ 普通である
☐ 劣っている
☐ 非常に劣っている

4. 外部評価の結果

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をすると思われますか。

- ☐ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☒ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☐ 確かにそう思う
- ☒ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

別紙に、2000 字～3000 字程度で、ご自由にコメントをお書き下さい。

なお、次ページの様式は 40 字×36 行ですので A 4 判 2 ページ分が約 3000 字にあたります。

ご評価をいただき、たいへんありがとうございました。

コメント

本プログラムは、教育研究の対象を従来のように制度・思想・学力といった文化的に明示的でその意味で相対的には学の対象としやすい領域ではなく、幸福感・達成感・有能感・生命感という心的・抽象的な、その意味で本質的な構成概念に据えている点が斬新であり、教育学と心理学の共同プログラムとしての特色を生かした新しい問題設定となっている。同時にこの心的・抽象的構成概念を対象としたことが、その本質的問いに見合う学的成果に結びつけることの困難さにもつながりうると思われる。

本プログラムでは、この困難な課題に対し、A.基礎過程、B.システム、C.サポート、D.開発評価の4ユニットを立て、京都大学の豊富な学術的人材とその多様な理論的・方法論的専門性を的確に配置しながらアプローチを試みており、その初期フェイズとして見たとき、全体として充実した成果をあげつつあるといえるだろう。それは約180本の査読論文(うち半数以上が国際誌に掲載)に象徴されている。

同時に、今後のプロジェクトのさらなる発展を考えたとき、いくつか気づいたことを指摘しておきたい。

(1) 問題設定の明確化

「心が活きる」「育てながら自らも育ち、育てられながら育つ力をつける」というスローガンは、現代教育の課題としてさまざまな領域で叫ばれている教育の今日的な問題設定であるが、これを単なる響きのよい抽象的スローガンにとどめるのではなく、教育学や心理学の理論の中に位置づけ、実証科学の中で操作的に定義して記述し、さらに教育実践の中に実装しその成果を検証する道筋を明確にするのが、本プロジェクトに科せられた社会的使命であると思われる。そして本プロジェクトを構成する4ユニットの有機的連携活動がそれを可能にすることを目指していると思われる。

しかしながら、いまの多様な研究成果を見ると、個人の内的過程、個人間の相互作用、社会システム、文化差など、次元に異にするリサーチクエスションが拡散している印象が否めない。有機的連携については、EX ラボの実施のようなイベントが企画され、また20年度の目標として「リスク・マネジメント」「リスク・パフォーマンス」を作業概念として設定し具体的研究活動が据えられているようである。だが、それらは単独の企画、あるいは個別のリサーチプログラムの実施に止まり、持ち前の世界をリードする多様な専門分野をさらに俯瞰するスケールの大きな「連携」を具体的に実施するシステムが稼働しているように思われない。例えばブータン王国幸福感調査はユニット合同の企画として、その有機的連携による成果が期待される興味深いプロジェクトと思われるが、それが具体的に何をどのように明らかにし、それを日本の教育問題とどのように関連させるか、そのために4ユニットがどのように連携してゆくのかのビジョンは未だ不明確である。

このようにさまざまな次元のリサーチクエスションを単に並列させるに止まらず、有機

的な関連をつけるためには、問題設定のより具体的な明確化を、ある程度理論ベースに、あるいは現象ベースに設定する必要があると思われる。おそらく概念的には A.基礎過程ユニットがそうした統括的位置にあると思われるが、これも個々のリサーチクエスチョンを見る限り、その役割を果たすような部門として機能しているのか疑問である。個別分野の理論的・方法論的連携をプロジェクト実施期間を通じて実現できるようなコアとなるシステム（ユニットの統括組織を作り活性化し、主たる研究者レベルで異分野横断をさらに強化するなど）を明確にすることが望ましい。

（2）教育実践への実装

本プロジェクトの魅力は、心理学と教育学の架橋領域において、伝統的な学力や学校教育という枠内にとらわれず、心理的過程への教育学的視点の取り込み、本質的教育問題への心理学的アプローチを実行できる点にあると評価している。特にこれが教育学領域のかかわる最も規模の大きな GCOE プロジェクトであることを考えたとき、成果の教育実践への実装がどのように実現されるかは、大きな関心事であるとともに、社会的責任の問われるテーマであろう。その目を見たとき、確かにいくつかの学校や社会教育活動との共同活動を実施する形で、教育実践との接点を確保していることは評価できるが、このような部門のもう少し組織的なビジョンと展開が必要なのではなかろうか。既存の教育システムに依らない教育の新たな形や、生涯発達を射程に据えて生活史のあらゆる段階の幸福感・達成感・有能感・生命感の活性化を、抽象的な理論に止まることなく社会に実装するためプロジェクトとしての取り組みにもう少し前向きでもよいと思われる。

また「こころ」は脳の中にあるのではなく、社会との関係の中に表れるものであるというような立場もあることを考えたときにも、心理学が中心に据えられた本プロジェクトのテーマとして、現実社会の中での心のあり方を、常に(広義の)教育実践の中でとらえる視点をどのユニットにおいても意識的に行って欲しいと考える。

（3）教育のパラドクス

幸福感・達成感・有能感にはパラドシカルな側面が内在する。つまりそれと一見正反対のベクトル、すなわち不幸、目標の喪失、劣等感などが、実は人間の成長にとって最も重要な機能を果たすことはまれではない。ベートーベンが聴力を健康に持ち続けられていたら、あのような音楽は作り得なかったであろう。「心が活きる」のような響きのよいスローガンを掲げたこのような学際的プロジェクトだからこそ、このような教育のパラドシカルな側面、つまり一見ネガティブな作用のもつ意味や機能の明確化を是非とも射程に入れた展開を期待したい。これはネガティブなベクトルをポジティブに向き変えるという表面的な問題ではなく、ネガティブでありつづけることに意味があるものである。このような面は従来の教育学や心理学では必ずしも光が当てられてこなかったが、教育哲学や臨床心理学者も擁する本プロジェクトだからこそアプローチ可能な重要課題ではないだろうか。

外部評価用スコアシート

文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
(拠点番号： D-08、拠点リーダー：子安増生（京都大学教育学研究科）)

名 前： 安彦 忠彦
所 属： 早稲田大学教育・総合科学学術院教授
記入日： 2008 年 12 月 14 日

お送りした資料に基づいて評価をお願いいたします。各項目について、5段階のいずれか一つに○をお付け下さい。

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

 非常に高い
☒ 高い
 普通である
 低い
 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

 非常に高い
☒ 高い
 普通である
 低い
 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

 非常に優れている
☒ 優れている
 普通である
 劣っている
 非常に劣っている

4. 外部評価の結果

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をすると思われますか。

- ☐ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☒ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☐ 確かにそう思う
- ☒ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

別紙に、2000 字～3000 字程度で、ご自由にコメントをお書き下さい。

なお、次ページの様式は 40 字×36 行ですので A 4 判 2 ページ分が約 3000 字にあたります。

ご評価をいただき、たいへんありがとうございました。

コメント

- (1) 全体を見て正当に評価するだけの力量はないが、自分の個人的な立場での研究関心からみても、全体としてよくやっていると評価したい。ただし、以下のような点で、その成果に影響が出ると思われるので、それを述べて今後の研究活動の参考にして欲しい。
- (2) 公募研究を見ると、脳科学に関わるミクロな神経生理学的次元から、心理学的次元、さらにはもっとマクロな社会経済学的次元に至るまでの、多次元階層的な総合研究なので、これらの次元・層をどういう軸で理論的・原理的に貫くのが、その成果を示す上で決定的に重要だと思われる。その軸ないし柱がどういうものかを、関係する研究者全員が共通に自覚しないまま研究活動を続け、その成果を不用意に公表すると、かえって混乱を生むことになるので、そうならないように総括グループのリーダーシップの在り方に工夫が必要である。2009年3月に刊行予定の『心が活きる教育—リスク社会と幸福感』(仮題)の中身が問われよう。反対に、あまりそういう縛りを上から与えないというのが本COEの趣旨かもしれないが、それなら総括グループを設ける意味がなくなる。
- (3) とくにマクロな次元では、外国研究者の外国での研究に「文化的要因」が必然的に入り込むので、その文化的差異への配慮をしっかりと示さないと、これまでの研究の水準を方法論的に越えるものにはならない。「有能感」「生命感」「達成感」そして「幸福感」というものが、この用語レベルでは共通でも、それを生みだすものが国によってバラバラに分かれる恐れがあり、理論的整理の限界を生まないかと危惧する。
- (4) 若手研究者の育成には大きな成果を挙げていると評価しており、今後も期待するところが大きい。ただし、外国研究者の組織には、規模や人選の上で、やや不安ないし不満を感じる。今後の充実を期待する。
- (5) 各研究者の研究成果は、どれもそれなりに興味深く面白いが、もう少し他の立場の研究者との対論・討論、ディスカッションの場の記録があると総合性が高まると思う。

以上。

(安彦忠彦)

外部評価用スコアシート

文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
(拠点番号： D-08、拠点リーダー：子安増生（京都大学教育学研究科）)

名 前： 小松 郁夫
所 属： 玉川大学教職大学院教授
記入日： 2008 年 12 月 23 日

お送りした資料に基づいて評価をお願いいたします。各項目について、5段階のいずれか一つに○をお付け下さい。

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☒ 非常に優れている
☐ 優れている
☐ 普通である
☐ 劣っている
☐ 非常に劣っている

4. 外部評価の結果

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をすると思われますか。

- ☒ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☐ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☒ 確かにそう思う
- ☐ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☒ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

別紙に、2000字～3000字程度で、ご自由にコメントをお書き下さい。

なお、次ページの様式は40字×36行ですのでA4判2ページ分が約3000字にあたります。

ご評価をいただき、たいへんありがとうございました。

コメント

本研究は、人間が教育を通じて知識と技能を獲得し、自身が何事かをなすことができるという「有能感」、自然や社会とつながることによる「生命感」、さらに、この2つの感覚を目標に向けて発揮することによって何かをなしえた「達成感」と「幸福感」というものを感じることができることを重視している。その研究目的を設定して、心と教育の諸問題に着目した枠組みから、「心が活きる教育」を研究する国際的教育・研究拠点を構想し、その諸問題に取り組む人材を育成する拠点の設置を目指したものである。

研究の基礎には、21世紀COE「心の働きの総合的研究教育拠点」の成果が存在し、そのより高度で実践的な発展として企画され、十分にその成果を生み出していることが認められる。特に、本学の長い間の歴史と伝統に裏打ちされた学問的成果を継承しており、その上で、新たな組織と研究者の協働的成果も組み込まれている状況が確認できる。

拠点形成の目的は明確であり、それに即した成果が内外の大学や学会等に提供され、研究の協働プロセスなどを通じた諸活動の状況で十分に実証されている。特に多様な方法論が問題の解明と理解と解決という3つの知の統合化としてまとめられていることが確認できた。また、特に若手研究者の育成と奨励、個人および大学院等の研究教育機関の活性化を目指した活動もめざましい成果を挙げており、創造性豊かな人材の育成が図られていることも研究成果などに結実している。

プログラムが終了した5年後に期待される成果に関しては、本研究の成果をもってすれば、世界最高水準の教育・研究が、研究活動を通じて形成された人脈や英文ジャーナル他の媒体を通じて、広く普及するものと確信できる。また、本研究に従事した創造性豊かな若手の研究者の将来性は本研究の状況を鑑み、優れた人材として活躍をする可能性がきわめて高く、学会だけでなく、社会との多様な連携・協力の進展も期待できる。

拠点の運営体制に関しては、拠点リーダーのリーダーシップが発揮され、個々の研究ユニットの研究成果の水準が極めて高く保証されているだけでなく、4つのユニットの相互関係、連携協力、サポート体制、目標とした開発内容など、機能的に実現できている。

年度ごとの研究成果について触れると、平成19年度には、ユニットAでは、幸福感の発生、達成感、生命感、有能感等に関する基礎的資料収集と一部の調査を開始している。私自身は、公募課題の中では、特に公募課題3の「ワーキングメモリと注意に及ぼす情動脳の影響」や公募課題5に「ユーモアの個体発生的起源の関する予備的検討」、公募課題6の「Collaborative executive control に関する探索的研究」などに注目している。

ユニットBでは、「幸福感の国際比較」が注目される。幸福感が比較教育学的に考察をして、どのようなことが解明できるのか、非常に注目される場所である。同様に、ユニットCでは、研究課題2の「心が活きるフィールド教育と生涯発達のサポートとシステム」や研究課題6の「発達障害への心理臨床的アプローチ」の研究計画と研究内容に特に興味

4. 外部評価の結果

を覚えた。

ユニットDが目指している開発評価では、比較尺度の設定、「FD・教育改善におけるオルタナティブ・モデルの構想」が適正な研究仮説と研究方法の下に、着実に成果を挙げていることが求められた。今度、ますますの成果の算出に期待するところである。

本研究の遂行と成果の普及には、密接な国際ネットワークの構築と強化が欠かせない。この点に関して、本研究では世界的に著名な大学と研究者とのネットワークを構築し、1年目から着実に成果を挙げている。今後、研究の進展に伴い、いっそう幅が広い共同体制が構築できるように、HPの充実を含めた創意工夫が望まれる。

教育活動に関しては、若手研究者の旺盛な研究意欲に支えられ、多くの独創的な研究が企画され、採択され、それらの研究を通じた人材育成が図られている。

こうした状況は、平成20年においても引き続き活発に実施されており、質の高い成果の実現が十分に期待できる。

以上のような状況を研究計画書や自己評価書のみならず、様々な資料や文献、研究活動、研究交流などの諸活動に認められる。よって、本研究の中間評価は極めて高いものと判断した。

外部評価用スコアシート

文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」

(拠点番号： D-08、拠点リーダー：子安増生（京都大学教育学研究科）)

名 前： 野島 一彦

所 属： 九州大学大学院人間環境学研究院教授

記入日： 2008 年 12 月 10 日

お送りした資料に基づいて評価をお願いいたします。各項目について、5段階のいずれか一つに○をお付け下さい。

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- 非常に高い
☒ 高い
 普通である
 低い
 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- 非常に高い
☒ 高い
 普通である
 低い
 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☒ 非常に優れている
 優れている
 普通である
 劣っている
 非常に劣っている

4. 外部評価の結果

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をすると思われますか。

- ☐ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☒ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☒ 確かにそう思う
- ☐ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

別紙に、2000字～3000字程度で、ご自由にコメントをお書き下さい。

なお、次ページの様式は40字×36行ですのでA4判2ページ分が約3000字にあたります。

ご評価をいただき、たいへんありがとうございました。

コメント

「心が活きる教育のための国際的拠点」は、時代になかったプログラムであり、興味と関心を強く惹かれた。コメントを以下に記したい。

1. 研究活動について

(1) 運営組織

研究活動を行うにあたり、京都大学の5部局から19人の事業推進担当者、研究協力者の教員・COE 研究員60人、さらに協力教員4人の連携という大所帯であるが、「執行委員会」とそれを補佐する実務委員会である「財務委員会」、「国際委員会」、「教育推進委員会」、「育成支援委員会」、「広報委員会」、さらに自己点検・評価部会、COE 事務局といった運営体制を構築し、組織として動きやすいようによく工夫されているように思われる。また、最重要課題である「幸福感の国際比較研究」については12人で構成される幸福感尺度検討会によって、積極的に研究が推進されるようになっており、厚みのある研究を行える体制をつくっているように思われる。本プログラムは2年目に入り、拠点の目的達成のために組織はより有機的に機能するようになってきている様子が伺われる。

(2) 各研究ユニットの研究の進捗状況

ユニットA(基礎過程)は、計画課題5件と公募課題6件の研究、ユニットB(システム)は、研究課題2件と公募課題2件の研究、ユニットC(サポート)は、研究課題1件と研究課題5件の研究、ユニットD(開発評価)は2件の研究課題の研究が報告されている。進捗状況をみると、ユニットC(サポート)が他に比べてやや遅れ気味のような印象を受けるので、今後アクティブに研究推進が行われていくことを期待したい。またユニットD(開発評価)の研究はとても魅力的で実際のなものであるので、大いに注目されると思うだけに、是非立派な研究成果が出ることを願いたい。

26 ページの囲みのなかに、「自律的分散的活動は活発に行われているが、協調的活動（研究のコラボレーション）はむしろこれからの課題である。」と記述されているが、今後は協調的活動（研究のコラボレーション）に向けて、実現の努力が行われていくことを強く期待したい。

(3) 国際的ネットワークの形成

海外の研究機関との研究交流は、6つの機関との交流が行われていることが報告されている。確かに相互連携活動は順調に進んでいると言えよう。27 ページの囲みのなかに、「次の課題は、個別の機関を超えた研究ネットワークの形成である。」と記述されているが、確かにその通りである。そのための手は着実に打たれつつあるが、この課題が実現されることを強く願いたい。

4. 外部評価の結果

2. 教育活動について

教育活動に関しては、「専攻を超えた研究指導体制」、「EX ラボによる有機的関連」、「研究の国際化および国際的情報発信」、「ポスドク・プログラム」、「大学院修了後キャリア形成プログラム」といった形で多彩に展開されていることが報告されており、これらにかなり力を入れて取り組んでいることが分かる。いずれも魅力的なプログラムであり、順調に推移しているように思われる。

ただ、31 ページの囲みのなかに「公募の中には、応募数が募集人員に満たないものもあり、今後募集内容や募集人員の妥当性を検討する必要がある。」と記述されていることに関しては、早急に検討を行い、対応をしていただきたい。そうでないとせっかくの魅力的なプログラムがもったいないように思われる。

また同じ囲みの中に、「今後の課題として取り組むべきことに、外国の研究機関に所属する大学院生やポスドクの招聘・交流事業を一層活性化することがあげられる。」と記述されているが、国際化の時代にあつて、若い世代にとってはそれらの実現はきわめて有益であるので、是非、実現に向けて努力をしていただきたい。

3. 社会連携および広報活動について

教育機関との社会連携として、京都市立高倉小学校における取り組み、寝屋川市立田井小学校における取り組み、京都市立洛風中学校における取り組み、滋賀県立膳所高等学校における取り組み、野殿・童仙房での生涯学習の取り組みが報告されており、積極的に取り組んでいる様子が伺える。ただ、33 ページの囲みの中に、「司法機関や医療機関との連携も順調に進めている。」と記述されてはいるものの、その中身が見えないのが残念である。司法機関や医療機関との連携がどのようになされているのかはとても興味が惹かれるだけに、今後はそれらについても記載されるように望みたい。

社会連携・広報活動にとって、拠点のホームページを重要な柱と位置づけ、日本語ページだけでなく、英文ページも充実させている点は、とても良いことだと思われる。現代はインターネット社会でもあり、ホームページの充実はこのプログラムを広く周知させる上できわめて有効であると考えられる。また、英文ページに力を入れることは、「グローバル COE プログラム」という性質上、当然必要なことであり、よく努力されているように思われる。

またホームページだけでなく、一般読者向け図書『心が活きる教育—リスク社会と幸福感』の公刊が企画されているようであるが、我が国ではまだインターネット社会に慣れていない人々も多数いることを考えれば、これは必要なことであると言えよう。一般読者向け図書という位置付けなので、より多くの人に読んでもらえるように分かりやすいものになることを願いたい。

33 ページの囲みの中に、「今後の課題として、市民講座のような形式を通じての社会連携・広報活動の充実についても検討し実施していく必要がある。」と記述されているが、こ

4. 外部評価の結果

のような形式をとることはホームページ、図書とは違った角度からの広報活動となるし、直接的に双方向的なやりとりも可能なので、是非実現されるよう期待したい。

4. 平成 19 年度および 20 年度の活動について

平成 19 年度は、初年度であったにもかかわらず、目標 1、目標 2、目標 3 は概ね達成されているように思われる。平成 20 年度は、まだ進行中のものが多くて評価し難いが、是非達成されるよう願いたい。

外部評価用スコアシート

文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
(拠点番号： D-08、拠点リーダー：子安増生（京都大学教育学研究科）)

名 前： 長谷川 寿一
所 属： 東京大学大学院総合文化研究科教授
記入日： 2009 年 1 月 8 日

お送りした資料に基づいて評価をお願いいたします。各項目について、5段階のいずれか一つに○をお付け下さい。

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☒ 非常に優れている
☐ 優れている
☐ 普通である
☐ 劣っている
☐ 非常に劣っている

4. 外部評価の結果

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☒ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をすると思われますか。

- ☒ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☐ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☒ 確かにそう思う
- ☐ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☒ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

別紙に、2000字～3000字程度で、ご自由にコメントをお書き下さい。

なお、次ページの様式は40字×36行ですのでA4判2ページ分が約3000字にあたります。

ご評価をいただき、たいへんありがとうございました。

コメント

本拠点は、拠点形成の目的が明確に示され、拠点形成の計画も適切に構造化されている。中間評価では、二年次までの成果に基づく評価を行うが、初年次の期間が短かったことと交付額が計画申請の約半分になったというハンディにもかかわらず、全体としてみれば、拠点形成事業はきわめて順調に進行していると言える。以下、自己点検に記されている、運営組織、ユニット研究、国際ネットワーク形成、教育活動、社会連携および広報活動について、順に意見を述べさせていただく。

・ 運営組織

本拠点は、19名の事業推進担当者と研究協力者60名からなる大型プロジェクトである。拠点リーダーの強力なリーダーシップのもと、運営のエンジンに相当する「執行委員会」が頻繁に開催され、機能的なステアリングが達成されている。さらに財務、国際、教育推進、育成支援、広報に分かれた実務委員会が執行委員会をサポートする体制がとられている。ただし、財務と国際委員会に関しては、執行委員会がその機能を兼担できるようなので、今後組織のスリム化が図られてもよい。コアメンバーの7名と、他の事業推進担当者（12名）の運営上の役割の分担が自己点検・評価報告書からは読み取れなかった。研究組織としては、「心が活きる教育」をめぐる基礎過程、システム、サポートおよび開発評価の4つのユニットが置かれているが、研究領域としては妥当な区分である。

・ ユニット研究

ユニットA（基礎過程）では、計画課題「幸福感に関する基礎的研究-幸福感の科学をめざして」を軸に、21世紀COEの主要な成果である感情科学をベースに、幸福感、達成感、生命感、有能感に関する基礎過程の実証的研究が展開されている。近年、欧米ではポジティブ心理学が急速に進展しているが、ユニットAの諸研究はそのような世界的動向とも合致している。心理学、認知科学、神経科学分野では、トップクラスの国際誌での研究報告が活発に行われている。また京都大学の伝統であるフィールド研究として行われている、台湾山中の鄒族における現地調査はユニークであり、今後の研究成果の公刊が期待される。

ユニットB（システム）では、課題研究として「幸福感の国際比較」（ユニットDとの合同）でブータン王国における幸福感の調査と、米、英、印などを対象とした幸福感に関する比較教育学的研究が行われている。ユニットAの実験研究に比べて、業績の発表がやや遅れているが、これは研究法の違いによるもので、今後の進展が期待できる。二つの公募課題は、教育法の開発と学力に関する国際比較分析で、社会のニーズにかなうものである。

ユニットC（サポート）では、ロンドン大学での国際交流プログラムが成功裏に終了した他、ウィーン大学との多文化研究の国際ワークショップが実施され、国際的な拠点形成事業が着実に進行している。

ユニットD（開発評価）では、計画課題「幸福感の国際比較研究に向けた比較尺度設定

4. 外部評価の結果

のための予備研究」において、ベルリン自由大学との共同研究がスタートし、日本とドイツでの学校と家庭におけるフィールドワークが予定されている。数年を要する研究課題なので、今後の進展が期待される。もう一つの計画課題では、「心が活きる教育」のためのFDのあり方が検討されている。大学教育の基本にかかわる重要な課題であり、「相互研修型FD」の具体化が望まれる。

ユニット研究全体としてみると、分野の性質上、研究成果の公刊時期に差がみられるが、どのユニットにおいても、活発な研究が行われている。大型プロジェクトでは、ともすれば個別研究に分散しがちであるが、本拠点においては「心が活きる教育」という目標に向かって、一体感が伝わってくる。国際共同研究も順調にスタートしている。

・ 国際ネットワーク形成

申請書に記載された通りに国外の5つの大学との連携事業は、順調に進展している。また、国際公募により、ドイツ人研究者が助教として採用されている。

・ 教育活動

博士課程大学院生に対する人材育成プログラムとしては、海外留学資金、院生養成プログラム、研究開発コロキウムが用意されており、厳正な審査を経て、いずれも有効に活用されている。なかでも「研究開発コロキウム」は博士課程院生が、修士課程院生・学部学生を受講者とする授業形式で実施する研究助成で、研究を教えながら開発していくきわめてユニークなシステムである。

分野を越えた受講生に対する外国語による授業「国際研究フロンティア」も、大学院教育の国際化に有効である。

さらに、EXラボプログラムでは、修士1年生を対象に、異分野体験型の演習が実施され、高い受講率を示している。

若手研究者の国際交流は、海外への留学制度がさかんに活用されているが、逆に、海外からの招聘はまだ増やす余地があるように思える。

ポスドク・プログラムとしては、予算の削減により、採用予定数を減らさざるをえなかった。なお、全国公募により4名が採用されたが、京都大学大学院以外からは1名にとどまっている。

・ 社会連携および広報活動

社会連携については、教育学研究科の「教育実践コラボレーションセンター」との密接な協力のもとに、関西圏の小中高等学校との連携が実施されている。広報活動は、おもにホームページを通して行われている。見やすく構造化されたホームページであり、目的や活動内容がわかりやすく示されている。また国際拠点に相応しく、英語版も整備されている。アクセス数を増やす各種の工夫（リンクの拡張や定期的な読み物など）が考えられてもよい。一般向けの図書についても今後、順次、刊行されるようであり、期待がもてる。

社会的発信としては、マスコミを通じた広報活動がもっとも効果があるので、マスメディアとのより積極的な連携がなされてもよいだろう。

外部評価用スコアシート

文部科学省グローバル COE プログラム「心が活きる教育のための国際的拠点」
(拠点番号： D-08、拠点リーダー：子安増生（京都大学教育学研究科）)

名 前： 松浦 良充
所 属： 慶應義塾大学文学部教授
記入日： 2008 年 12 月 18 日

お送りした資料に基づいて評価をお願いいたします。各項目について、5段階のいずれか一つに○をお付け下さい。

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

- ☒ 非常に高い
☐ 高い
☐ 普通である
☐ 低い
☐ 非常に低い

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☒ 非常に優れている
☐ 優れている
☐ 普通である
☐ 劣っている
☐ 非常に劣っている

4. 外部評価の結果

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

- ☐ 非常に優れている
- ☒ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をすると思われますか。

- ☒ 非常に大きな貢献をするであろう
- ☐ ある程度の貢献をするであろう
- ☐ どちらともいえない
- ☐ あまり貢献をしないであろう
- ☐ 全く貢献しないであろう

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。

- ☒ 確かにそう思う
- ☐ どちらかといえばそう思う
- ☐ どちらでもない
- ☐ どちらかといえばそう思わない
- ☐ 全くそう思わない

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

- ☒ 非常に優れている
- ☐ 優れている
- ☐ 普通である
- ☐ 劣っている
- ☐ 非常に劣っている

別紙に、2000字～3000字程度で、ご自由にコメントをお書き下さい。

なお、次ページの様式は40字×36行ですのでA4判2ページ分が約3000字にあたります。

ご評価をいただき、たいへんありがとうございました。

コメント

本拠点の学術研究・教育活動の水準は、中間評価の現時点における総合的判断としても、また今後の到達可能性の推測としても、非常に高度なものとして評価できる。

まず何よりも、本拠点では、その目的や計画の概要に明記されているように、「心が活きる教育」という包括的なテーマを軸に、これまで必ずしも緊密な学術的協働が良好に機能していなかったと思われる心理学と教育学について新たな連携の可能性を積極的に追求しようとしている。このことは、当該学術研究・教育領域にとつてのみならず、広く日本の学術研究・教育全体に及ぼす影響を考えると、非常に意義深いものがある。またこの試みは単なる模索の段階にとどまっておらず、中間評価の現時点においても、さまざまなプログラムとして具体化されている。「心理学と教育学の交差」および各サブ・ディシプリン間の協働に対して、拠点の研究者（教員および大学院生）の参画が果敢に推進されている。

特に評価者としては、心理学・教育学の「融合」を試み、いたずらに新領域を開拓しようとするのではなく、心理学・教育学それぞれのディシプリンおよびサブ・ディシプリンの基盤を尊重しながらそれらの連携をはかる、という本拠点の姿勢を高く評価したい。なぜならば大学院生および若手研究者にとって、そのキャリア形成の初期段階においては、既存ディシプリンのもとでの学問的な訓練を基盤とすることが有効であると考えからである。もっとも教育をはじめとする人間の心身の活動をめぐる問題状況は複雑化の様相を呈している。したがって既存ディシプリンのみでこうした問題状況に対処しきれないことは明白である。各ディシプリン間の連携がますます必要になっていることは、各方面で指摘・自覚されていることでもある。特に今後研究者として自立してゆく若手にとってはこうした要請がより強まることも確実であろう。しかしながら研究者はもちろんのこと、それにとどまらず本拠点がめざしているような心理学・教育学関連職をめざす大学院生にとっては、まず蓄積のある個別ディシプリン領域での基礎訓練を基盤とすることによって、そこを足場（まさに「拠点」）としながら、学際的・領域横断的にその学術研究・教育活動を構成してゆくという筋道を用意することが、今後の学術の発展には欠かせないであろう。こうした観点からも本拠点の構想設計は、非常に有効であると思われる。

周知のようにグローバル COE の眼目は、国際的に卓越し競争力をもつ拠点形成とそれを基盤として世界をリードする人材育成にある。本拠点は、この両面に関して、周到な企画化・組織化がなされているが、とりわけ傑出しているのは人材育成面である。特に専攻を超えた研究指導体制としての「研究開発コロキウム」は、まさに「育てる人を育てる」という本拠点のユニークな研究テーマをプログラム化しているものである。心理学・教育学の研究者・関連専門職にとって、教育や人間形成は単なる外在的な研究対象にとどまるものではない。教育・人間形成の研究とその教育がまた循環的に当該分野の研究と教育の課題を生起させるという自己言及的特性をもっている。また後述するように、グローバル COE の拠点形成の成果が持続的なものとして発展的に継続されるためには、大学院博士課程に

4. 外部評価の結果

おける研究・教育の充実のみならず、関連分野の修士課程・学士課程における研究・教育活動への貢献も視野に入れることが重要になってくる。そうした観点からも「研究開発コロキウム」の意義は大きいと考えられる。さらにこのプログラムには、21 世紀 COE および魅力ある大学院教育イニシアティブの活動実績が基盤となっていると推測できる。そうした観点からも、グローバル COE の活動期間を終えた後も継続的・発展的に充実することが予測および期待できるプログラムである。なお人材育成に関しては、これ以外にも多様なプログラム設計がなされている。特に海外留学資金は非常に充実していると思われる。また大学院修了後のキャリア形成プログラムについても今後のさらなる展開が期待できる。

以上のように、本拠点の活動は、現時点でもその独自性を発揮し高水準にあると評価できるが、今後の発展の可能性を期待して、以下の点について私見を述べておきたい。

1. 本拠点は、研究協力者の教員・COE 研究員を含めると約 80 名に及ぶ比較的大規模な構成となっている。その運営や活動の統括のための組織は、執行委員会を中心として機能的に編成されている。ただし自己点検・評価報告書によれば、実務委員会等の「活動状況には精粗がある」とのことである。4つの研究ユニットに関しても、数多くの多彩な課題が展開されているが、ユニット間の区分におさまりきらないものもあるように思われる。実際すでにユニット間合同の企画なども行われている。今後、研究・教育活動の展開に応じて、運営組織や研究組織については、柔軟な再編成が行われてもよいのではないかと。また一部の事業推進担当者に運営上・研究上の負担や課題が偏らないような工夫も必要とされるのではないかと、と思われる。

なおユニット C に関して、「計画課題と 6 件の公募課題を推進した」とあるが、実際に報告されているのは、「計画課題 1」と「研究課題 2～6」となっている。

2. 上とも関連するが、このように規模が大きく多様な課題を含む本拠点の研究・教育活動の最大の課題は、これらをどのように連携させ包括的な成果にまとめあげてゆくか、ということになるだろう。すでに自己点検・評価報告書においても、「自律的分散的活動は活発に行われているが、協調的活動（研究のコラボレーション）はむしろこれからの課題である」と認識されている。困難な課題ではあるが、すでに一般読者向けの出版計画も進行中とのことである。今後、社会的な貢献も含めて、拠点形成の大きなテーマのもとに、外部からもその成果のまとまりが理解されやすいような形で展開されることに期待したい。

3. またグローバル COE はその趣旨からすれば、競争力ある大学を育成するための、まさに「拠点」形成を課題としているはずである。したがって決して一過的な活動にとどまることは望ましくない。拠点採択期間を終えた後も、関連部局における研究・教育が充実するような持続可能性を視野に入れる必要があると思われる。そのためにも、前述したことではあるが、直接的な拠点形成の対象である大学院博士課程のみならず、修士課程・学士課程への波及効果、また拠点形成に直接的にかかわるものにとどまらない恒常的な研究・教育活動との関連に十分配慮したプログラムがより充実することを期待したい。

5. 外部評価結果の総括

I. スコアシートによる全体的評価結果

まず、6人の外部評価委員のスコアシートによる評価結果を、用意した7つの評価項目別にまとめたものが表1である。以下、それぞれの評価項目について総括を行う。

表 1 外部評価結果のまとめ

評価項目		1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。	2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポストドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）	3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。	4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。	5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をしますか。	6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われますか。	7. 本拠点の総合評価をお願いします。
安藤 寿康	心理学	非常に高い	非常に高い	優れている	優れている	ある程度の貢献をするであろう	どちらかといえばそう思う	優れている
安彦 忠彦	教育学	高い	高い	優れている	優れている	ある程度の貢献をするであろう	どちらかといえばそう思う	優れている
小松 郁夫	教育学	非常に高い	非常に高い	非常に優れている	優れている	非常に大きな貢献をするであろう	確かにそう思う	非常に優れている
野島 一彦	心理学	高い	高い	非常に優れている	優れている	ある程度の貢献をするであろう	確かにそう思う	優れている
長谷川寿一	心理学	非常に高い	非常に高い	非常に優れている	優れている	非常に大きな貢献をするであろう	確かにそう思う	非常に優れている
松浦 良充	教育学	非常に高い	非常に高い	非常に優れている	優れている	非常に大きな貢献をするであろう	確かにそう思う	非常に優れている

(敬称略)

1. 本拠点形成事業推進者の研究業績から判断して、本拠点の現在の学術研究活動のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

本拠点の現在の学術研究活動のレベルは最高度の「非常に高い」が4人、それに次ぐ「高い」が2人と大変高く評価された。たとえば、次のような高い評価を得ている。

「本プログラムは、教育研究の対象を従来のように制度・思想・学力といった文化的に明示的でその意味で相対的には学の対象としやすい領域ではなく、幸福感・達成感・有能感・生命感という心的・抽象的な、その意味で本質的な構成概念に据えている点が斬新であり、教育学と心理学の共同プログラムとしての特色を生かした新しい問題設定となっている。・・・(中略)・・・京都大学の豊富な学術的人材とその多様な理論的・方法論的専門性を的確に配置しながらアプローチを試みており、その初期フェイズとして見たとき、全体として充実した成果をあげつつあるといえるだろう。それは約180本の査読論文（うち半数以上が国際誌に掲載）に象徴されている。」（安藤委員）

他方、同じ委員からは次のようなことも指摘されており、より有機的に研究を推進する体制の整備を図ることが求められている。

「さまざまな次元の研究クwestionsを単に並列させるに止まらず、有機的な関連をつけるためには、問題設定のより具体的な明確化を、ある程度理論ベースに、あるいは現象ベースに設定する必要があると思われる。おそらく概念的にはA. 基礎過程ユニットがそうした統括的位置にあると思われるが、これも個々の研究クwestionsを見る限り、その役割を果たすような部門として機能しているのか疑問である。個別分野の理論的・方法論的連携をプロジェクト実施期間を通じて実現できるようなコアとなるシステム（ユニットの統括組織を作り活性化する、主たる研究者レベルで異分野横断をさらに強化するなど）を明確にすることが望ましい。」（安藤委員）

2. 本拠点に所属する大学院生あるいはポスドク等の研究業績から判断して、本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルをどのように判断されますか（絶対評価）。

本拠点の現在の教育活動・人材育成のレベルは、最高度の「非常に高い」が4人、それに次ぐ「高い」が2人であり、ここでも大変高く評価された。それは、たとえば次のような評価に表れている。

「拠点形成の目的は明確であり、それに即した成果が内外の大学や学会等に提供され、研究の協働プロセスなどを通じた諸活動の状況で十分に実証されている。特に多様な方法論が問題の解明と理解と解決という 3 つの知の統合化としてまとめられていることが確認できた。また、特に若手研究者の育成と奨励、個人および大学院等の研究教育機関の活性化を目指した活動もめざましい成果を挙げており、創造性豊かな人材の育成が図られていることも研究成果などに結実している。」（小松委員）

「教育活動に関しては、「専攻を超えた研究指導体制」、「EX ラボによる有機的関連」、「研究の国際化および国際的情報発信」、「ポスドク・プログラム」、「大学院修了後キャリア形成プログラム」といった形で多彩に展開されていることが報告されており、これらにかなり力を入れて取り組んでいることが分かる。いずれも魅力的なプログラムであり、順調に推移しているように思われる。」（野島委員）

「博士課程大学院生に対する人材育成プログラムとしては、海外留学資金、院生養成プログラム、研究開発コロキウムが用意されており、厳正な審査を経て、いずれも有効に活用されている。なかでも「研究開発コロキウム」は博士課程院生が、修士課程院生・学部学生を受講者とする授業形式で実施する研究助成で、研究を教えながら開発していくきわめてユニークなシステムである。」（長谷川委員）

「周到な企画化・組織化がなされているが、とりわけ傑出しているのは人材育成面である。特に専攻を超えた研究指導体制としての「研究開発コロキウム」は、まさに「育てる人を育てる」という本拠点のユニークな研究テーマをプログラム化しているものである。」（松浦委員）

3. 本拠点の活動は、他の関連する国内の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

国内の他の教育研究機関・グループと比較して、本拠点の活動のレベルは最高度の「非常に優れている」が 4 人、それに次ぐ「優れている」が 2 人と大変高く評価された。

国内の他の教育研究機関やグループと直接比較したコメントは得られていないので、どのような比較対象との比較の結果からこのような結論を得たかは定かではないが、たとえば次のような評価が得られた。

「本拠点の学術研究・教育活動の水準は、中間評価の現時点における総合的判断としても、また今後の到達可能性の推測としても、非常に高度なものとして評価できる。」(松浦委員)

4. 本拠点の活動は、他の関連する国外の教育研究機関やグループと比較して、どのレベルにあると判断されますか。

国外の他の教育研究機関・グループと比較して、本拠点の活動のレベルは最高度の「非常に優れている」の評価はなく、6人全員がその次の段階の「優れている」にとどまった。

しかし、コメントでは具体的な国外の教育研究機関やグループと比較しての本拠点について評価や水準の論及は見られなかった。「関連する国内の教育研究機関」にも当てはまることであるが、設問の設定の仕方として、具体的な国外の教育研究機関をあげてもらいながら、比較を行えるように工夫する必要があるだろう。

5. 本拠点は、わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をしますと思われるですか。

わが国の学術研究ならびに高等教育の向上にどの程度の貢献をするかについては、最高度の「非常に大きな貢献をするであろう」が3人、その次の「ある程度の貢献をするであろう」が3人となった。次は、具体的な評価内容の一例である。

「「心が活きる教育」という包括的なテーマを軸に、これまで必ずしも緊密な学術的協働が良好に機能していなかったと思われる心理学と教育学について新たな連携の可能性を積極的に追求しようとしている。このことは、当該学術研究・教育領域にとってのみならず、広く日本の学術研究・教育全体に及ぼす影響を考えても、非常に意義深いものがある。またこの試みは単なる模索の段階にとどまっておらず、中間評価の現時点においても、さまざまなプログラムとして具体化されている。」(松浦委員)

6. 本拠点は、「国際的研究拠点」の名にふさわしいと思われるですか。

「国際的研究拠点」の名にふさわしいかどうかについては最高度の「確かにそう思う」が4人、それに次ぐ「どちらかといえばそう思う」が2人と大変高く評価された。以下は、評価内容の一例である。

「本研究の遂行と成果の普及には、密接な国際ネットワークの構築と強化が欠かせない。この点に関して、本研究では世界的に著名な大学と研究者とのネットワークを構築し、1年目から着実に成果を挙げている。今後、研究の進展に伴い、いっそう幅が広い共同体制が構築できるように、HPの充実を含めた創意工夫が望まれる。」（小松委員）

7. 本拠点の総合評価をお願いします。

総合評価結果は、最高度の「非常に優れている」が3人、それに次ぐ「優れている」が3人と高く評価された。具体的な評価の内容は、以下の通りである。

「拠点形成の目的は明確であり、それに即した成果が内外の大学や学会等に提供され、研究の協働プロセスなどを通じた諸活動の状況で十分に実証されている。特に多様な方法論が問題の解明と理解と解決という3つの知の統合化としてまとめられていることが確認できた。・・・(中略)・・・プログラムが終了した5年後に期待される成果に関しては、本研究の成果をもってすれば、世界最高水準の教育・研究が、研究活動を通じて形成された人脈や英文ジャーナル他の媒体を通じて、広く普及するものと確信できる。また、本研究に従事した創造性豊かな若手の研究者の将来性は本研究の状況を鑑み、優れた人材として活躍をする可能性がきわめて高く、学会だけでなく、社会との多様な連携・協力の進展も期待できる」（小松委員）

「本拠点は、拠点形成の目的が明確に示され、拠点形成の計画も適切に構造化されている。中間評価では、二年次までの成果に基づく評価を行うが、初年次の期間が短かったことと交付額が計画申請の約半分になったというハンディにもかかわらず、全体としてみれば、拠点形成事業はきわめて順調に進行していると言える」（長谷川委員）

「本拠点の学術研究・教育活動の水準は、中間評価の現時点における総合的判断としても、また今後の到達可能性の推測としても、非常に高度なものとして評価できる。まず何よりも、本拠点では、その目的や計画の概要に明記されているように、「心が活きる教育」という包括的なテーマを軸に、これまで必ずしも緊密な学術的協働が良好に機能していなかったと思われる心理学と教育学について新たな連携の可能性を積極的に追求しようとしている。このことは、当該学術研究・教育領域にとってのみならず、広く日本の学術研究・教育全体に及ぼす影響を考えると、非常に意義深いものがある。」（松浦委員）

Ⅱ. 本拠点のこれからの課題

外部評価の前提となった自己点検・評価は、2008年11月時点でのそこまでの活動の評価であった。この節では、その後の活動の報告と今後の課題を述べて、本報告書を締めくくりたい。

まず、平成20年度の4つの目標（39ページ参照）のうち「目標2：幸福感の国際比較研究に必要な尺度を構成するため、予備調査を実施しデータを分析する。また、国際調査で不可欠な調査項目の翻訳（バック・トランスレーションを含む）をこの年度に済ませておく」と「目標3：「サポート」と「開発評価」の研究ユニットで国際ワークショップを実施する」は、昨年11月の時点では未達であったが、その後の4か月の間にかなりの部分を達成している。

（1）幸福感尺度検討会

目標2については、幸福感尺度に関する2つの小規模の予備調査を実施した。しかし、そこで用いられた尺度と項目は、本調査の尺度と項目のごく一部を構成するものにすぎないものであり、平成21年度には本格的な予備調査と本調査の両方を実施する予定である。

幸福感尺度検討会は、日本人教員・研究員8人（子安、藤田、鈴木、楠見、大山、内田、小島、櫻井）に外国人教員のベッカー（アメリカ出身）、ダラスキー（アメリカ出身）、モイゼス・キルク（ブラジル出身）、マッティク（ドイツ出身）を加えた12人のメンバーから成る国際色豊かな組織であり、20年度に開催の7回の会議（平成20年8月10日、9月29日、11月10日、12月15日；平成21年1月13日、2月23日、3月19日）の成果として、調査のフェイスシート（デモグラフィック変数）と89の尺度項目を日本語・英語の両方で準備できた。その尺度項目は、達成感・有能感・生命感および幸福感等の相互の関係を明らかにする目的で構成されている。

また、この尺度を用いて幸福感の国際比較研究を行うための調査対象国は、英語圏（アメリカ、カナダ、イギリス、ニュージーランド）、ドイツ語圏（ドイツ）、スペイン語圏（スペイン、メキシコ）、中国語圏（中国）などを想定して調査の準備を進めている。

（2）国際シンポジウム

目標3の「C. サポート」と「D. 開発評価」の研究ユニットで国際ワークショップ（シンポジウム）を開催することについては、以下の3つのシンポジ

ウムを実施した。いずれも、多くの聴衆を集め、興味深い話題提供と熱心な質疑が行われた。

■第4回グローバル COE 共催シンポジウム「病と臨床―病に生きる人間にみる臨床の知」(ユニットC)

日 時：2008年11月17日(月)

場 所：京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール

タイトル：「病と臨床―病に生きる人間にみる臨床の知」

企 画：皆藤章(京都大学、企画代表者)・河合俊雄(京都大学、企画分担者)

話題提供：河合俊雄(京都大学)・清水亜紀子(京都大学)・Alan Jacobson (Joslin 糖尿病センター副所長)

指定討論：西平直(京都大学)・野間俊一(京都大学)

■第3回グローバル COE 共催国際シンポジウム「日本のFDの未来」(ユニットD)

日 時：2009年1月24日(土)～25日(日)

場 所：京都大学 芝蘭会館

タイトル：日本のFDの未来 ―Building the core in faculty development―

話題提供：Mary T. Huber (カーネギー教育振興財団)、Jennifer M. Robinson (インディアナ大学ブルーミントン校)、飯吉透 (MIT 教育イノベーション・テクノロジー局)、Frank Prochaska (ノースカロライナ大学チャペルヒル校) 他



写真：シンポジウム「日本のFDの未来」(京大芝蘭会館)

■第3回グローバル COE 主催国際シンポジウム「The self, the other & language II: Dialogue between philosophy and psychology」(ユニット C)

日時：2009年2月28日(土)～3月1日(日)

場所：京大会館

テーマ：The self, the other and language II: Dialogue between philosophy and psychology

話題提供：英国側 Paul Standish、Jan Derry (以上、ロンドン大学) 他

日本側 楠見孝、西平直 (以上、京都大学) 他



写真：シンポジウム「The self, the other and language II」(京大会館)

(3) 『心が活きる教育—リスク社会と幸福感』企画

安彦委員と松浦委員から企画に対して期待の寄せられた一般書『心が活きる教育—リスク社会と幸福感』は、2009年3月刊行の予定であったが、進行が遅れている。ここでは、企画書の目次(予定)のみをかかげておきたい。

目次

- 序章 子安増生 (教育学研究科)：心が活きる教育に向かって
- 第1章 佐藤卓己 (教育学研究科)：マスメディアが伝える幸福感
- 第2章 松下佳代 (高等教育研究開発センター)：能力の概念と幸福感
- 第3章 鈴木晶子 (教育学研究科)：家庭と学校における幸福感—日独比較
- 第4章 杉本 均 (教育学研究科)：ブータンに学ぶ幸福感
- 第5章 杉万俊夫 (人間環境学研究科)：過疎地域のリスク・マネジメント
- 第6章 桑原知子 (教育学研究科)：南極越冬隊員のストレスと幸福感
- 第7章 藤田和生 (文学研究科)：動物観と幸福感

コラム

板倉昭二（文学研究科）
稲垣恭子（教育学研究科）
岡田敬司（人間環境学研究科）
河合俊雄（こころの未来研究センター）
カールベッカー（こころの未来研究センター）
齋木 潤（人間環境学研究科）
田中耕治（教育学研究科）
辻本雅史（教育学研究科）
西平 直（教育学研究科）
松沢哲郎（霊長類研究所）
矢野智司（教育学研究科）
山田洋子（教育学研究科）

（4）国際ネットワークの形成

本拠点にとって国際的ネットワークの構築は、一つの重要な柱である。平成 21 年度以後も具体的な共同事業の計画が進行している。

英ランカスター大学：具体化している案として、英ランカスター大学との国際シンポジウムを京都大学において次のような要領で開催する予定である。

日 時：2009 年 7 月 24 日（金）

場 所：時計台記念館国際交流ホールⅡ

テーマ：「記憶と認知」に関連するもの

話題提供：ランカスター大学から 4 人招聘、日本側 4 人

その他：7 月 25 日（土）サテライトシンポジウム

英ロンドン大学：ロンドン大学教育研究所とは、京都大学との大学間協定の締結が 21 年度中にはおこなわれる見込みであり、2009 年 9 月には第 3 回国際シンポジウムをロンドン大学教育研究所で開催する計画が進行している。

独ベルリン自由大学：ベルリン自由大学との「リスクと幸福感」の共同研究も順調に推移している。平成 20 年度に国際公募を行って採用したドイツ人研究者ルプレヒト・マッティク（Ruprecht Mattig）COE 助教は、このベルリン自由大学の関連部門の出身であり、国際ネットワーク構築の実務を担当する。

以上のように、平成 21 年度以後の拠点の実施体制は順調に整いつつあり、今回外部評価委員からいただいた貴重なご助言およびコメントを拳拳服膺して進めていきたい。



Kyoto
University

Graduate School of Education

〒606-8501
京都市左京区吉田本町
京都大学大学院教育学研究科
Email: HGB03675@nifty.com
電話: 075-753-3063
FAX: 075-753-3063

2008 年 9 月 30 日

大学
先生

京都大学グローバル COE

「心が活きる教育のための国際的拠点」

拠点リーダー・子安増生

外部評価審査委員会のご協力をお願い

謹啓 時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、突然のお便り失礼申し上げます。私どものグローバル COE は、昨年度より、京都大学の心理学および教育学のスタッフが総力を挙げて「心が活きる教育のための国際的拠点」形成のために取り組んでまいりました。

具体的には、「心が活きる教育」とはどのようなものかを解明し、それをどのように理解し実践していくかについて、教育学研究科、高等教育研究開発推進センター、文学研究科、人間・環境学研究科、及びこころの未来研究センターに所属する心理学および教育学の研究者が参加して研究拠点を形成し、(A)「心が活きる」とはどういうことかを研究する基礎過程、(B)「心が活きる」ために必要な制度設計について研究するシステム、(C)「心が活きる」ために有効な心理的サポートについて研究ならびに実践を行うサポート、(D)国際共同研究として「幸福感の国際比較研究」を実施する開発評価という4つの研究ユニットを中心に研究を進めております (<http://www.educ.kyoto-u.ac.jp/gcoe/>)。

本年度は、事業の2年目にあたり、グローバル COE プログラム委員会から中間評価を受けることになっております。これに対応するため、自己点検・評価書を作成し、事前に外部評価を受けることにいたしました。外部評価をお願いする先生は、関連学会でご高名かつご見識があり、私どもの拠点とは直接のつながりがない方をお願いする必要がございます。慎重に検討いたしました結果、先生に是非お引き受けいただく、ここにお願いするしだいでございます。

私どもの拠点だけでなく広く学術の発展につながるものにいたしたく、ご多忙とは存じますが、枉げてお引き受け賜りますようよろしくお願い申し上げます。評価の作業をお願いする時期は、11月中旬から12月中旬の約1か月間、書面による審査(評価とコメント)を予定しています。

お手数ですが、同封の書面にて諾否のお返事を賜りますようお願いいたします。

末筆ながら、先生のご健康とご研究のご発展をお祈りいたします。

敬具



Kyoto
University

Graduate School of Education

〒606-8501

京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科

Email: HGB03675@nifty.com

電話: 075-753-3063

FAX: 075-753-3063

2008 年 11 月 13 日

大学
先生

京都大学グローバル COE

「心が活きる教育のための国際的拠点」

拠点リーダー・子安増生

グローバル COE の外部評価のお願い

謹啓 時下、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、事前にご依頼申し上げ、ご了解をいただきました私どものグローバル COE
「心が活きる教育のための国際的拠点」の外部評価をよろしく願います。

下記の同封物のうち、「平成 19 年度活動報告書」、「自己点検・評価報告書」、研究業績（書籍、論文別刷、新聞記事など）をご覧いただき、「外部評価用スコアシート」に評価のご記入をお願いします。手書きの場合は同封の返送用封筒にてご返信ください。あるいは、CD-R に収めました文書ファイルをご利用いただき、メールで子安（HGB03675@nifty.com）までご送信いただいても結構です。いずれの場合も、外部評価用スコアシートのコピーをしばらくお手元にお留め置きくださるよう、あわせてよろしくお願いします。

ご返送の期日は、ご多忙のところ誠に恐れ入りますが、2008 年 12 月 15 日（月）頃までに私どもの方に到着するように頂ければ幸いに存じます。

なお、お送りした資料は、外部評価完了後もしご返送には及びません。書籍がお邪魔でありましたら、勝手ながらご勤務先の図書館などにご寄贈賜れば幸いです。

以上、どうぞよろしくお願い申し上げます

敬具

記

同封物一覧

- ・「平成 19 年度活動報告書」
- ・「自己点検・評価報告書」
- ・研究業績：書籍一式
- ・研究業績：論文別刷、新聞記事など
- ・外部評価用スコアシート
- ・返送用封筒
- ・CD-R（自己点検・評価報告書、外部評価用スコアシートのファイル）

外部評価委員への送付業績リスト

年号	ユニット	区分	提出者	タイトル等
2007	A	論文	田中正之	Tanaka, M. (2007) Recognition of pictorial representations by chimpanzees (<i>Pan troglodytes</i>). <i>Animal Cognition</i> , 10, 169-179.
2007	A	論文	田中正之	Tanaka, M. (2007) Development of visual preference of chimpanzees (<i>Pan troglodytes</i>) for photographs of primates: effect of social experience. <i>Primates</i> 48, 303-309.
2007	A	論文	苅阪直行	Hirose, N., Kihara, K., Mima, T., Ueki, Y., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2007) Recovery from object substitution masking induced by transient suppression of visual motion processing: A repetitive transcranial magnetic stimulation study, <i>Journal of Experimental Psychology: Human Perception and Performance</i> , 33, 1495-1503.
2007	A	論文	苅阪直行	Matsuyoshi, D., Hirose, N., Mima, T., Fukuyama, H., & Osaka, N. (2007) Repetitive transcranial magnetic stimulation of human MT+ reduces apparent motion perception, <i>Neuroscience Letters</i> , 429, 131-135.
2007	A	論文	苅阪直行	Osaka, N., Otsuka, Y., Hirose, N., Ikeda, T., Mima, T., Fukuyama, H., & Osaka, M. (2007) Transcranial magnetic stimulation (TMS) of left dorsolateral prefrontal cortex disrupts verbal working memory performance in human, <i>Neuroscience Letters</i> , 418, 232-235.
2007	A	論文	櫻井芳雄	Takahashi, S. and Sakurai, Y. (2007) Coding of spatial information by soma and dendrite of pyramidal cells in the hippocampal CA1 of behaving rats. <i>European Journal of Neuroscience</i> , 26, 2033-2045.
2007	A	論文	櫻井芳雄	Nomura, M., Sakurai, Y. and Aoyagi, T. (2007) Analysis of multineuron activity using the kernel method. <i>Journal of Robotics and Mechatronics</i> , 19, 364-368.
2007	A	論文	齋木 潤	Saiki, J., & Miyatsuji, H. (2007). Feature binding in visual working memory evaluated by type-identification paradigm. <i>Cognition</i> , 102, 49-83.
2007	A	論文	齊藤 智	Saito, S., & Towse, J. N. (2007). Working memory as a construct in cognitive science: An illustrious past and a highly promising future. <i>Psychologia</i> , 50, 69-75.
2007	A	書籍	船橋新太郎	Funahashi, S. (Ed.) (2007) " <i>Representation and Brain</i> " Springer Verlag.
2007	A	書籍	藤田和生	藤田和生 (編著) (2007) 感情科学. 京都大学学術出版会. 405pp.
2007	B	翻訳書	川崎良孝	ジョン・E. ブッシュマン著, 川崎良孝訳『民主的な公共圏としての図書館：進公共哲学の時代に司書職を位置づけ持続させる』京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2007年11月, 277p.
2007	B	書籍	杉万俊夫	Sugiman, T., Gergen, K., Wagner, W., & Yamada, Y. (2007) <i>Meaning in Action Constructions, Narratives, and Representations</i> (pp.344), Springer.

2007	C	論文	伊藤良子	『心理臨床を学ぶ—無意識に開かれた「場」との出会い』 臨床心理学 第7巻第1号 3-7 金剛出版 2007
2007	C	論文	伊藤良子	『箱庭療法の不思議と可能性』 臨床心理学 第7巻第6号. 739-743, 金剛出版, 2007.
2007	C	論文	斉藤直子	「大人の教育としての哲学：デューイからカベルへ」 『近代教育フォーラム』 第16号(2007):51-66頁。
2007	C	論文	角野善宏	角野善宏 (2007) 「箱庭療法の限界と効用?風景構成法と夢分析を併用した事例から」, 『臨床心理学』, 第7巻, 第6号, pp.758-764.
2007	C	論文	矢野智司	「死者への負い目と贈与としての教育—教育の起源論からみた戦後教育学の課題と限界点」 『近代教育フォーラム』 教育思想史学会、第16号、2007年9月、pp.1-10.
2007	C	書籍	桑原知子	『臨床心理学』朝倉心理学講座9 (編著：桑原知子、若林明雄・遠藤利彦・永田法子・田中康裕・角野善宏・山森路子・金山由美・大山泰宏・藤山直樹・北口雄一・神村栄一・廣瀬幸市・牧剛史・駿地眞由美・石原宏著) 朝倉書店, 2007.4
2007	D	論文	子安増生	Mizokawa, A., & Koyasu, M. (2007) Young children's understanding of another's apparent crying and its relationship to theory of mind. <i>Psychologia</i> , 50, 291-307.
2007	D	論文	松下佳代	松下佳代 (2007) 「コンピテンス概念の大学カリキュラムへのインパクトとその問題点—Tuning Projectの批判的検討—」 『京都大学高等教育研究』 第13号, 101-119.
2007	D	論文	松下佳代	松下佳代 (2007) 「カリキュラム研究の現在」 『教育学研究』 第74巻第4号、567-576.
2007	D	書籍	子安増生	子安増生・西村和雄 (編) (2007) 『経済心理学のすすめ』. 有斐閣
2008	A	論文	大塚結喜	Otsuka, Y., Osaka, N., & Osaka, M. (2008) Functional asymmetry of superior parietal lobule for working memory in elderly, <i>NeuroReport</i> , 19, 1355-1359.
2008	A	論文	田中正之	Kano, F., Tanaka, M., & Tomonaga, M. (2008) Enhanced recognition of emotional stimuli in the chimpanzee (<i>Pan troglodytes</i>). <i>Animal Cognition</i> , 11, 517-524.
2008	A	論文	西平 直	「世阿弥『伝書』における「いまここ」—時に用ゆるをもて花と知るべし」 『人間性心理学研究』 第25巻第2号 2008年、37-48.
2008	A	論文	荳阪直行	Hirose, N., & Osaka, N., Object substitution masking induced by illusory masks: Evidence for higher object-level locus of interference, <i>Journal of Experimental Psychology, Human Perception and Performance</i> , in press.
2008	A	論文	荳阪直行	Kaneda, M., & Osaka, N. (2008) Role of anterior cingulate cortex during semantic coding in verbal working memory, <i>Neuroscience Letters</i> , 436, 57-61.
2008	A	論文	藤田和生	Nakamura, N., Watanabe, S., & Fujita, K (2008) Pigeons perceive an assimilation illusion induced by the Ebbinghaus-Titchener circles. <i>Journal of Experimental Psychology: Animal Behavior Processes</i> , 34(3), 375-387.

2008	A	論文	藤田和生	Miyata, H., & Fujita, K. (2008). Pigeons (<i>Columba livia</i>) plan future moves on computerized maze tasks. <i>Animal Cognition</i> , 11, 505-516.
2008	A	論文	櫻井芳雄	Hirokawa, J., Bosch, M., Sakata, S., Sakurai, Y. and Yamamori, T. (2008) Functional role of the secondary visual cortex in multisensory facilitation in rats. <i>Neuroscience</i> , 153, 1402-1417.
2008	A	論文	齋木 潤	Saiki, J. (2008) Stimulus-driven mechanisms underlying visual search asymmetry revealed by classification image analyses. <i>Journal of Vision</i> , 8(4):30, 1-19.
2008	A	論文	齋木 潤	高橋康介, 齋木 潤 (2008) 動的な変形に対する視触覚間同時性判断. 心理学研究, 78, 599-606. (優秀論文賞受賞)
2008	A	論文	齋木 潤	Takahashi, K., Saiki, J., & Watanabe, K. (2008) Realignment of temporal simultaneity between vision and touch. <i>NeuroReport</i> , 19, 319-322.
2008	A	論文	齊藤 智	Saito, S., Jarrold, C., & Riby, D. M. (in press) Exploring the forgetting mechanisms in working memory: Evidence from a reasoning span test. <i>Quarterly Journal of Experimental Psychology</i> .
2008	A	論文	齊藤 智	Saito, S., Logie, R. H., Morita, A., & Law, A. (2008) Visual and phonological similarity effects in verbal immediate serial recall: A test with Kanji materials. <i>Journal of Memory and Language</i> , 59, 1-17.
2008	A	書籍	辻本雅史	辻本編著『教育の社会史』放送大学教育振興会 (pp.257).
2008	A	書籍	岡田敬司	Okada, K. (2008) <i>Du l'établissement de l'autonomie</i> (pp.208), Matrice.
2008	A	書籍	西平 直	武川正吾・西平直編『シリーズ死生学 第三巻・死とライフサイクル』(東京大学出版会、2008年)
2008	A	書籍	苅阪直行	苅阪直行(編著) (2008) ワーキングメモリの脳内表現 京都大学学術出版会
2008	A	書籍	藤田和生・板倉昭二	Itakura, S., & Fujita, K. (eds.) (2008) <i>Origins of the social mind: Evolutionary and developmental views</i> . Tokyo, Springer Verlag.
2008	A	書籍	櫻井芳雄	櫻井芳雄 (2008) 脳の情報表現を見る. 京都大学学術出版会.
2008	A	記事	田中正之	新聞記事7編
2008	A	記事	藤田和生	Problem-solving pigeons. by Matt Walker (18 March 2008)
2008	B	論文	楠見 孝	Komeda, H., Kawasaki, M., Tsunemi, K., & Kusumi, T. (2008). The differences between estimating protagonists' and evaluating readers' Emotion in narrative comprehension. <i>Cognition and Emotion</i> .

2008	B	論文	楠見 孝	Sugimori, E. & Kusumi, T. (2008) Limiting Attentional Resources Influences Performance and Output Monitoring of an Event-Based Prospective Memory Task. <i>European Journal of Cognitive Psychology</i>
2008	B	書籍	佐藤卓己	佐藤卓己『テレビ的教養—億総博知化の系譜』NTT出版. 2008年
2008	B	書籍	西岡加名恵	田中耕治・西岡加名恵編著 (2008) 『「学力向上」実践レポート』教育開発研究所、2008年
2008	B	書籍	楠見 孝	メタファー研究の最前線
2008	B	記事	佐藤卓己	新聞記事15件
2008	C	論文	伊藤良子	『河合隼雄という巨木』 臨床心理学 第8巻第1号 金剛出版 3-7.
2008	C	論文	山田洋子	やまだようこ (2008) 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル. 質的心理学研究, 7, 21-42.
2008	C	書籍	大山泰宏	「イメージの表象から表象不可能性へ」 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕編『心理臨床における臨床イメージ体験』 37-45頁, 創元社, 2008
2008	C	書籍	斉藤直子	「科学の客観性・技術の普遍性: プラグマティズム、懐疑主義、悲劇の感覚」 飯田隆・他編集岩波講座『哲学』 第9巻 (岩波書店 2008年) 133-154頁
2008	C	書籍	田中康裕	「ユングの『ファルススの夢』—そのイメージ体験と思惟」 藤原勝紀・皆藤章・田中康裕編『心理臨床における臨床イメージ体験』 69-80頁, 創元社, 2008.
2008	C	書籍	山田洋子	やまだようこ (編) (2008) 人生と病いの語り 東京大学出版会
2008	C	書籍	矢野智司	『贈与と交換の教育学—漱石、賢治と純粹贈与のレッスン』 東京大学出版会、2008、全333頁
2008	C	記事	明和政子	新聞記事1件
2008	D	論文	子安増生	小川絢子・子安増生 (2008) 幼児における「心の理論」と実行機能の関連性: ワーキングメモリと葛藤抑制を中心に. 発達心理学研究, 19, 171-182.

平成20年度外部評価報告書「心が活きる教育のための国際的拠点」

発 行 者：子安 増生（グローバル COE 拠点リーダー）

刊行年月：平成 21 年 3 月 17 日

印刷会社：中西印刷株式会社

連 絡 先：〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院教育学研究科・子安 増生

電話・ファックス 075-753-3063 直通

電子メール HGB03675@nifty.com
